家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

51.1.21
国会図書館

第七十五巻　第二号　日本幼稚園協会

2

待望の全巻がそろって登場です!!

全６巻別冊索引付

保育カリキュラム資料

各800円　フレーベル館編

新刊！→ ６《小事典》

☆子どもたちとどうやって接していこうか、
☆あしたのカリキュラムには、何をもりこもうか、
☆どうやって子どもたちを喜ばせようか、
と毎日、頭を悩ませている、保育者であるあなたへ
おくる最良の《小事典》です。

「年間の生活」と題して１年間の行事・自然・子どもの生活を、検索に便利なように各月１ページごとの表にまとめました。また、子どもに与えたい本にはどんなものがあるかという「子どもの本」、すばらしい保育者となるための「保育者のための本」などのユニークな項目を充実させています。その他にも「動物を飼う」「植物を育てる」「応急手当」などの必須事項はとくに詳述しています。

〈内容〉

年間の生活／レコード・歌／スライド・紙芝居／子どもの本／絵画製作／動物を飼う／植物を育てる／自然遊び／視聴覚教育のための機器／遊具／健康な園生活／障害をもつ子ども／保育者のための本／統計資料／あると便利な小物一覧

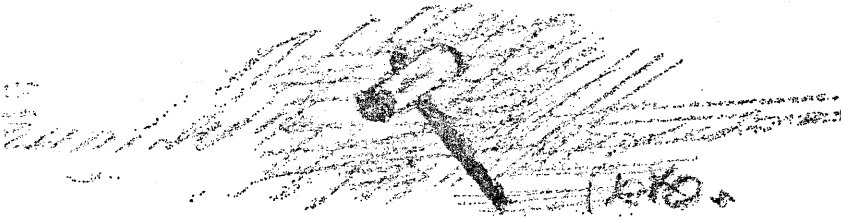
既刊・保育カリキュラム資料・１～５巻

① 春（４月、５月、初めての園生活）
② 夏（６月、７月、８月、夏休み）
③ 秋（９月、10月、11月、運動会）
④ 冬（12月、１月、２月、３月、進学の準備）
⑤ 遊び

フレーベル館

幼児の教育

第七十五巻　第二号



幼児の教育　目次

――第七十五巻　二月号――

表紙　永瀬善郎（「もの想う天使」）

カット　中島英子

©1976
日本幼稚園協会

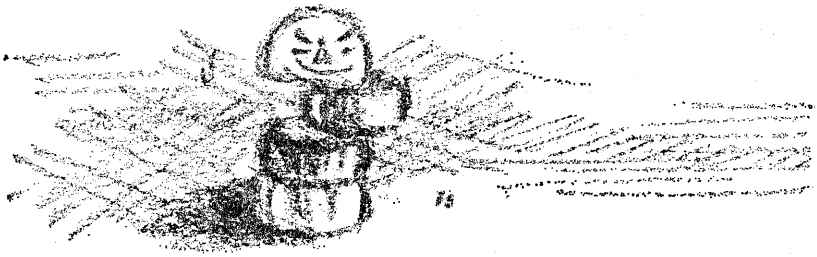
幼児の運動能力について……山下俊郎…(4)

私の幼児教育論（一）……清水美智子…(6)

幼児教育に〝ゆとり〟と〝ゆめ〟と〝ゆたかさ〟を……松隈玲子…(14)

こすもす保育園見学日記その二―絵本をよむ―……竹田都志子…(18)

「日本幼児保育史」研究余滴（二）……長玲子…(27)



★講演

これからの世界と日本の子ども（一）……矢島釣次…(32)

ひとつの出会いに思うこと……浅野恭子…(43)

教科研究における保育の授業の展開（一）……磯部景子…(48)

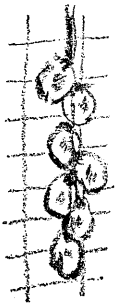
「それぞれの子どもらしさを求めて」より（六）……(54)

最近の本から……津守真(59)

ハリス先生をお訪ねしたときのこと……田中都慈子(60)

幼児の運動能力について

山下俊郎



わたくしは、幼児の運動能力は、子どもの精神発達の中で非常に大切な意義を占めていると思う。このことは、今までにわたくしの書いた論文、著書の中に、何十回となく書いてきたことである。

ところで、わたくし始め、多くの内外の心理学者が述べているように、子どもの発達には一定の順序がある。発達のシークェンスと言われているものである。運動能力の発達は、そのことを説明するのに、最も具体的ではっきりしているので、よく例に引かれている。それは「頭部→尾部」「中心→末梢」という二つの方向であるが、このうち後の方の中心→末梢というのが、とくに幼児期にかかわりを持っている。すなわち、中心というのは身体の中心および中心に近いいわゆる大筋肉を使う運動であって、全身運動あるいは大筋肉運動とわたくしたちが呼んでいるものであって、それが一通り発達して、その基礎の上に末梢の運動、具体的に言うと手先きの細かい運動能力などが発達するのである。そして、全身運動は幼児期から小学校低学年の時期に発達する。だから、この時期に全身運動の能力が発達しないと、後になって末梢的な運動が順調に発達しないで不器用な子どもになる。したがって、幼児期には全身運動の発達を進めることが、大切な課題なのである。

ところが、この頃の子どもは総じてあまり運動をしない生活をしている。これには、住居やその近隣環境の問題も関連しているし、生活様式もかかわりを持っている。住居が狭い、戸外でもうんと動きまわれる広い遊び場に恵まれていない、またどこへ行くにもバスやマイカーに乗るので、以前の子どものように歩くということが少ない。このようなことの結果として、運動能力が全体として発達していない。身体そのものは、太平洋戦争前にくらべて、戦後は一貫して大きくなり続けていることが、厚生省の十年毎の統計にはっきり現われており、とくに最近の昭和四十五年の

統計を見ると、著しく大きくなっている。このような身体そのものの著しい発達にもかかわらず、運動能力は一向にのびていないのである。日本保育学会が、昭和二十九年と昭和四十四年に十五年の間隔をおいて行なった幼児の精神発達の全国調査で見ると、調べた運動能力の項目二十九項目のうち、昭和四十四年度の方が優位のものは僅か三項目であり、四十四年度の方が二十九年度より落ちているものが十三項目もあり、残りの十三項目は横ばい状態であった。すなわち、全体として見るとき、運動能力は、幼児の体位が向上しているにもかかわらず、一向にのびていない、体位と関連して言えばむしろ低下しているのである。

わたくしたちは、全国的規模で調査した右の結果が、一幼稚園でどのように現われているかを、東京家政大学附属みどりヶ丘幼稚園の年長児組に、二十年間継続して行なっている体力測定のうち、昭和四十年から四十九年の十年間の結果について検討してみた。その結果、みどりヶ丘幼稚園の園児の体位は、全国平均を大きく上まわっているが、体力測定による全身運動の能力にはそれ程ののびが見られないという結論を得た。対象となった園児数は少ない年は二十七人、多い年でも三十九人であるので、一般的なことは言えないが、家庭環境も中以上であり、体位も前に述べた通りであるのに、また十年間を通じて一貫して低下しているとは言えないが、とくに近年になって、運動能力の低下の方向をたどっている項目の多いことが注意を引いた。そして、運動能力そのものの段階値で見ても、体位の戦前の段階から言えば、はるか上位にあるにもかかわらず、運動能力の段階値では、せいぜい平均ないしやや平均より高い段階に位するから、体位との相対的評価から言えば、運動能力は低下していることが、わたくしたちの幼稚園児すなわち極めて少数の、いわば偏った集団についても言えることが、はっきりしてきたのである。

このことから、わたくしたちが反省しなければならないことは、読者にはきわめてはっきり分って頂けると思う。すでに六十年以上も前にアメリカの進歩主義教育者たちが、幼稚園児について大筋肉運動を充分にさせることが必要であることを指摘していることを、思い返す必要がある。園の保育の中では言うまでもなく、家庭の親たちに認識を改めさせることが何よりも大切であることをわたくしは訴えたいのである。（みどりヶ丘幼稚園児の運動能力についての調査は昨年の九月十一日日本教育心理学会第十七回総会で、園主事川崎千束さんおよび大学の川合貞子さんとの連名で発表したものである。）

私の幼児教育論（一）

清水美智子

子どもの生活をみつめて考えてきたこと

学生時代から、私は子どものいる所を訪ねるのが好きだった。目的もなく行く時もあれば、先輩の仕事の手伝いで行くときもあり、自分の資料を得るための時もあった。行先も様々であったが、その一つにろう学校があった。初めて訪れたのは十五年も前であろうか。早期教育の先がけをなして、そのろう学校の幼稚部は三歳クラスを設けたばかりであった。耳の悪い子どもらの幼稚部での生活にふれての印象は、こういう幼児教育もあるのだなという驚きであった。耳が聞えない——言語の自然習得ができない——特別の人工的な言語構築法をとらねばならない、というわけで、幼児から言語指導のカリキュラムに従って組織的な指導が行われる。それは子どもの自由な行動の制限から始まる。五～六人のクラスだが、視覚に頼る指導だから、常に先生の方に向って坐ることが要求される。先生の用意した教材が出されて、多少のハプニングはあっても、先生の予定した手順ですすめられていく。その時々に教えたいと意図することばや概念があって、それらを反復練習させる。微妙な文型の使い分けを限られた教材だけでその時正しくいえるまでやらせる。絵カードを使ってものの名を教え、それらを分類させて上位概念を表わす語を教えていく。教えたことがわかっているかどうかを絶えず確認しながら進められる。先生の要求通りの答えが出るか出ないかで、ヨロシイ、ダメの評価が与えられる。子どもは先生の評価をたえずうかがいながら反応する。文字の導入は早く、日記を書く指導にも力が注がれている。

もちろん、学生であった私には、簡単に指導法の適否を問題にする気はなかった。ただしかし、聞こえないということが、こんなにも幼児期の生活経験を変えざるを得ないのかという驚きがあった。それと同時に、このようなタイプの経験を中心に幼児期を

すごしていく時、子どもらはどのようなものの感じ方、考え方、行動のしかたを学ぶのだろうか、このような経験の総体から子どもらは何を学びとっていくのだろうかと考えた。聞こえないという障害の影響と、幼児期の生活経験のちがいがもたらす影響と、この両面から考えていかないとろう児の理解を誤ってしまうのではないか。学童期以降の、とくに九、十歳以降のろう児の心理的抽象的思考の困難さ、思考の硬さ、自己中心的性格傾向などが問題にされているのを知るにつけても、私は発達を実現させていく中味としての経験に興味をもつようになっていった。

その後、私は縁あって短大の保育科に勤務し、幼児の生活により深いかかわりをもつことになった。昭和三十七年の当時、幼稚園の先生という職は不人気のようで、家政科に比べて保育科を受験する学生は少なかった。私立短大協会の集まりでは、女子高校生に保育科のPRをしようという相談があったことを覚えている。だが、それから四、五年のうちに、いつのまにか保育科に光があたるように変っていった。幼児教育振興の声が、政財界からあがってきたことに支えられていた。短大の幼児教育科が急にふえ、あちこちの幼稚園が増改築をしはじめた。都市郊外の人口増が激しくなり、学生時代に行ったことのある古い小規模の園が、七百人の園児を擁する、立派な鉄筋二階建ての園舎をもつように変ったのを見て驚いたりしたものである。このような外側の変化、発展ぶりに目をうばわれているうちに、ときに保育内容そのものにも変化が生じていることに気づき始めた。その保育の印象は、不思議なことに、「まるでろう学校の幼稚部のようだ」という感じであった。もちろん耳はきこえているし人数も多いから、ちがった雰囲気もある。しかし何か似ている。何故だろう？　何がこの現象をうみ出してきているのか、そのときからずっと私は考えつづけている。

先生の指示に従って、どの子もみな同じことをやっていく。先生は一つ一つ確認しながら次にやるべきことを指示する。どんぐりを使って、「数の分解と合成」の指導が行われているところに出くわした。四十分の間に、どんぐりだけを教材にして、出したり入れたり離したり、くっつけたりの単調な作業を指示道りに行う。子どもたちは各々、自分の前の僅かな机上の空間だけを使う。となりの子も向いの子もみな同じことをする。いや、同じことをするように要求されている。最後にワークブックのそれに相当するページのいくつかのふうせんに色をぬり切り抜いて、今やってきたようないくつかの並べ方の通りにのりづけさせて終った。子どもたちは、どんぐりあそびをしながらたのしく数の知識の学習をしたということだった。

しかし私は、この子たちがそのとき、自分の頭も心も十分に使っていないということを見抜いてしまった。子どもの精神の沈滞を感じとってしまった。一体、あの驚きと発見と探求を求めていく子どものエネルギーはどこにいってしまっているのか。私の教え子のある幼稚園の先生が訪ねてきたとき、「〝先生あそばしてーな〟といってくる子どもたちを抑えて、ワークブックをこなしていかなければならないのは苦痛です」と話してくれたのを思い出す。やっぱり成長を志向する子どものエネルギーは閉じこめられているのだ。ワークブックの一ページは出来上った。けれども子どもは、新しい関係を発見し未知の世界にふみこんだ知的興奮を示してはいない。子どもはその場で自分を生かしていないなと私は見る。たとえ知識を得たとしても、それは素朴な感動と切りはなされた、ひからびたものにすぎないだろう。それは知識の量を少しはふやすかもしれないが、考えることのたのしさを知っていくきっかけにはならないし、思考力を育てていく糧にもならないだろう。

そんな見方は主観的だと反論する人がいるかもしれない。客観的にみたならば、子どもは数に関する正しい知識を確かに得たのだというかもしれない。だがしかし、もし感じるとか感動するとか、知的興奮をおぼえるといった心の働きを、主観的でという理由で正当にみとめないならば、客観的にものをみるとは無感動に生きることになる。それは自分の心で見ることを否定する、従って人間らしくあることを否定することになるではないか。これこそ人間疎外の思想の元祖だといえるだろう。私たち人間はもっとも人間的な心の働きを自らが不当に軽んじ切り捨ててきた営為の結果、今や自己疎外・自己喪失に陥りかけているようである。無気力・無感動な人間がふえてきた、遊べない子がふえてきた、という各種現場からの声を少し前から耳にするようになったが、私には象徴的である。

保育の科学化・現代化のかけ声で、新しい保育の動きがひろがっていくのをみながら、私は考えてしまう。保育の科学化・現代化とは、何とあいまいでひびきのよいことばだろう。あいまいなままに、目新しいことばの魔術にひっかかってしまって、ことばが何をあらわしているのか疑問をもって緻密に考えていくこともしなくなる。私には、この態度がとても非科学的な思考の典型のように思われるのである。第二次大戦中、国民学校の児童だった私は、鬼畜米英、神国日本……等といったことばにいいくるめられて、素朴な疑問を押し殺していた苦い経験から、私はひびきのいいことばを鵜呑みに出来ない習性を身につけている。自分の感覚がとらえていた素朴なものの方が真実だったという経験から、私にはひ

とつの信念ができている。自分が事実をみて何かしっくりこない不自然さを感覚的にとらえた時、素朴な疑問がでてくるとき、私はそれにこだわりつづけたい。納得のいくまで考えつづけたい。

保育の何を科学化しようとするのか、何故科学化する必要があるのか、何のためにするのか、具体的にはどうすることが科学化なのか、科学ということばをどんなイメージで使っているのか、そもそも科学とはどういう性格をもつものなのか……現代化についても同じように疑問がわいてくる。私は自分のとらえた疑問をいろいろの面から考えつづけてきた。現実の子どもの姿、保育者と子どもとの関係のあらわれをみて、自分の子どもとのかかわりを深める中で、自分もその中で生きている現代の社会・文化の状況をみつめて、また諸分野のすぐれた研究者の業績や思想を学んで、自分の想像力を駆使して、自分の疑問を解こうとつとめてきた。すると、どちらの方向から究めていっても同じ問題点がうかび上ってくることに気づく。この小論でも、光のあて方をいろいろ変えながら、私の考えをすすめていこう。

一つに、「科学的に正しい知識を教えていく」とか「科学的な正しい教え方を」という強い姿勢の中には、現時点における知識や科学の到達水準を絶対に正しいものとして絶対化する見方がある。けれども私の考察では、科学それ自体が歴史的に発展していく性質のものなのであり、その史的発展過程の一時期の姿として現代の科学をみるという相対的なとらえ方が欠けていることに気づく。歴史の流れをとめてしまって、現時点における科学技術や知識を科学研究の最高にして最終の成果の如く絶対化し、固定してしまう思いこみの思想を、真にすぐれた科学者ははっきり批判している。実際ある時期、ある面からみて正しい、有益だと思いこんでいた科学技術や知識が、その後の研究の進展に伴って否定されたり、致命的なマイナスの作用が明らかになった事実は、文明史上にもまた今日の社会の身近な例としても数多く見出せる。また人間の歴史をひもとく時、近代科学の成立はごく新しい時期のことであることもわかる。近代科学の成立以前にも、ずっと古くから人間はすぐれた叡智をもっていたことに気づく。たとえば、法隆寺の境内に立つとき、あるいは唐招提寺の金堂と対峙するとき、私は静かな感動とともに古人の知恵に思いをはせる。一千年以上も前の人々の叡智の結晶をまのあたりにするとき、合理的で正確な知識に裏づけられた精巧な技術と美意識を見事に融合させ得る古代文化の水準の高さに心うたれる。

一つの事実は、いろいろの角度から光をあててみていく時、また時間の経過をふんで始めてその本質がうかび上ってくる。このような相対的な見方をとらずに、現在の科学・学問の成果を絶対

化し、評価も定まっていないのに、新しいものこそ最高だとしていくような教育の科学化・現代化は、大変不遜な生体実験ではないだろうか。正当な理由も見出せないのに、ただ新しいからというだけでやるような生体実験が許されていいのだろうか。医学における生体実験にはきびしい批判の眼が向けられているが、医者とちがって教育は、その結果を直ちにそして一義的に評価できない。短時間に直線的に因果関係をおさえることができないがゆえに、子どもの人権を無視した生体実験まがいのことが堂々とまかり通っているのではないか。私は、自分の研究の対象となってくれた多くの子どもたちへの恩義からも、子どもに代ってこのことを告発せねばならない責任を感じてしまうのである。

知育の根本課題は何か——発達心理学的観点

思考・認識能力の発達過程を研究してきた私の視野からみると、知育の根本課題は、いかにして正しい知識を、いかに多く、いかに早く教えるかということではなく、いかにして認識能力を高めていくか、いかにすれば思考過程が発展していくか、真に主体的に考える人間が育つには、いかなる経験の過程が必要かということなのである。現時点の人間がもっている知識を絶対化することはできない以上、私たちは後の世代が「世界」をより広く深く認識していく能力、一つの枠組に固定せず柔軟に思考をすすめていけるような人間的資質を高め育てていくことを重要な課題としなければならないだろう。実際、社会は常に動いている歴史の流れの中にある。前の世代が遭遇しなかったような新しい事態にぶつかり、生きぬいていかねばならない後の世代を育てる視点を現時点に限ることは愚かである。私たちが、現在の科学が到達しているレベルの知識を、早く正確にたくさん教える式の教育が重要だとは思われない。未知の世界に立ち向っていくエネルギーと探求心、とらわれなく多面的にみることができ、考えをいろいろに発展させていくことのできる柔軟な思考の態度を育てていく過程こそ、幼い時から一貫して重視されるべきだと、私は考える。

おもしろいことに、このような人間の、子どもからおとなへの思考の発展は、私が一つの問題をとらえ考えをすすめていく過程と重なっているようである。少くとも、私の一連の思考過程において使われる認識活動は、子どもが順次獲得していく異なるタイプの認識をすべて含んでいることに気づく。

たとえば、この小論の始めにとりあげたように、私は現実に遭遇したある状況から、全体的印象として何かを感じとる。もちろん、それ以前の諸々の経験に支えられてであるが、漠然とした疑

問や興味をもち始める（融合的全体の知覚、直観的認識）。その興味を追求して私はいろいろの知的探索活動を行っていく。行動的にまた思索的に。意図的に半ば組織的に経験を求めていく。しかしまた問題意識（興味）をもっていることによって、日常生活の偶然経験、非意図的な経験が思索を深めることもある。人との対話によって、読書経験によって、直接経験の域をこえて想像をめぐらして経験を広げ深めていく。また思いがけない過去の経験から大きなヒントを得ることもある。もちろんまだはっきりと言語的に整理できないモヤモヤした一連の動きをとらえているような段階である（前概念的、イメージ的、動作的認識）。こうした諸経験の幅を広げ蓄積し、異質のものから学びとっているうちに機が熟し、混沌の中から次第に何かがうかびあがってくる——あるとき洞察がおこって事がらの本質がつかめる。はじめに直観的にとらえていたことの全体の関係構造がみえてくる。こうなってはじめて、自分のことばで整理し、一貫した論理で説明できる（概念化、構造化、言語的論理的認識）。もちろん、一つのことがわかってくるということは、同時に新しい疑問や興味が次々と芽生えてくることでもあり、かくてあくことなき知的探求がつづくわけである。このように、私たちが明快な言語的論理的認識に至るまでには、言語化できない動作、イメージ的な認識活動、前概念的な水準における認識活動が、自由闊達に展開される長い過程が必要なのであり、それは一見、無駄ともみえるような、多様な異質の幅広い経験をもつことによって可能になる。そしてそれらの諸経験を導いていくのは積極的関心であり直観であり、想像活動なのである。

右に述べたような思考過程（知的生産過程）の展開は、決して私ひとりの特殊な内省報告ではなく、広い分野にわたるもっと優れた人々がすぐれた業績をうむ創造的な思考過程を語られている際に、普遍的に認められる。私にとって興味深いのは、こういう思考過程の展開が、実は子どもが十分に言語的認識の可能な水準に至るまでの思考の発達過程の再体験に近いということなのだ。発達心理学的知見によれば、人間の個体発生において、言語的論理的認識の出現は最もおそく、七、八歳以降、より高度には十一、二歳以降であること、そしてそれはこれに至るまでの長い道のりにおいて獲得され展開されてきた具体的動作的認識、前概念的水準の認識経験を土台にして、はじめて可能になる性質のものであることが明らかにされている。

育ちに必要な成熟時間

幼い子どもは先ず感覚的に動作的に少しずつ自分と自分の囲りの世界を知っていく。毎日くり返される変化を含んだ経験から自分と自分の囲りの世界との関係を認知していく。歩行が自由になると独立の行動世界が拡大してくる。更に家庭内の生活に加えて家庭外の生活が拡がり、母子の関係に加えて仲間との関係が拡がって、行動的具体的にかかわる世界が多様化し、異質の経験が輻輳してくる。このような生活経験の多様化の中から新しい興味がうまれたり、変化する現象や矛盾する事実に気づき、自分のやり方を変えてみたり、新しい関係を発見したり、もっと深い知識を求めてくるといった探求心にみちた内面的活動を不断に行っていく。既習の知識が少いからこそ、既製の概念にしばられず自由にものとものとの関係をつくり出したり、現実をとり入れながら現実を超えて、自由な想像の世界を構築していくことができる。童心を失ったおとなからみれば非論理的で無駄のようにみえたり、正しいか否かという基準をもってくれれば否定されてしまうが、現実をつくりかえ発展させていくことのできる創造的思考の芽がそこにある。このように未だかたまらず、興味のおもむくままに自由にイメージを拡げ、経験を求め蓄積していく過程は、個人の思考の発達に必要な「成熟時間」なのだと私は思う。探求や発見や創造には、喜びがあり感動があり快い知的興奮があるという意味で、この「成熟時間」はまた、人生を生き抜いていくのに必要なプラスの情緒を育くんでいく貴重な時でもある。

自然界のすべての生物には、それぞれに固有の成熟時間が要る。小さな庭で様々の植物を育てている。その事が実感として伝わってくる。季節の移り変わりと自然界の変化を注意深く観察していると、やはりそのことに気づく。人間も自然界の一構成員である。けれども人間は科学技術を駆使して自然の営みに手を加え、人間の都合に合わせて成長を促進させたり遅らせたりするようになった。さらに時間を短縮して既格品を効率第一に生産していく工業の論理が支配的になってきた近年の文明状況が背景にあって、人間の「成熟時間」をも短縮しよう、短縮できるという方向に考えが及んできた。成長過程の経験の無駄を排し、合理的に精選して科学的に正しい知識を正しい方法で教えていくという考えで、教育の科学化・現代化が推進されてきた。しかし私は、すでに科学の性格を考察して、現時点での科学の知識を、従って現代文明を絶対化することはできないことを指摘した。さらに〝無駄〟にみえるような言語化以前の混沌とした諸経験を通しての認識活動が、ほとんどは無駄なのではなく、知的生産過程において必須の認識活動であることを論証しようとした。いわば〝無用の用〟を認める思想を提示しようとした。子どもの認識機能の発達

の過程を短縮して、早く言語的概念的に整理された理論を得させようとするならば、それは単に断片的な表面的な知識をふやすだけでなく、自ら知識を求めていく能動性、子ども自身が新しい場にのぞんで自由に主体的に考えていく能力の発達を阻害してしまうおそれがある。これからの社会で生きていくのにほんとに必要な、認識能力の発達障害をひきおこしてしまうのではないか。これでは知育偏重というよりも、真の知育ではないといえよう。

（つづく）（大阪教育大学）

永瀬義郎さんのこと

永瀬義郎氏は一八九一年（明治二十四年）生まれ、茨城県岩瀬町のご出身。十三歳で美術雑誌に応募して受賞されたことに始まり、十九歳の時、上野美術学校（現在の芸大）彫刻科に入学されたが、のち京都美術学校（現在の京都美大）に移られ、東京の荒木十畝塾で日本画も学ばれた。昨年六月東京で開かれた「日本版画史を生きる永瀬義郎のすべて展」の目録によると、〃生来の放浪癖から……〃とあるが、実に多彩な生活を送られて現在に至った方である。そして、北原白秋、広津和郎、日夏耿之介、長谷川潔氏らに始まる交遊の広さは、年を追うごとに広まって、永瀬義郎という方の作品ばかりではなく人間の魅力をうかがわれる。一九二九年三十八歳の時フランスに遊学、七年間パリで活躍され帰国後しばらく関西で制作活動をされた。第二次世界大戦中は中央画壇から離れて地方文化の高揚を計られ、終戦後上京されて再び版画制作に入られた。その後は当然のことのように八十四歳の現在も、かくしゃくとして世界的に活動されている方である。

＊　＊　＊　＊　＊

私がこの永瀬さんのことを知ったのは、この版画展の紹介をテレビで見たのが初めてでした。今回幸せなことに表紙にいただくようになった「もの想う天使」ほか数点と永瀬さんご自身がご出演になったのです。私は直感的に〃この方は本当に、もしかしたら子どもよりも子どもの心をもった方にちがいない〃と羨しいまでに思いました。そしてさっそく会場に出かけてすみからすみまで、胸をワクワクさせて見せていただきました。その時お見かけした永瀬さんは白と赤の大柄のアロハを召した白髪のおじいさま（失礼）でした。一生懸命どなたかと話しておられたのでご遠慮して、奥さまにちょっと声をおかけしました。〃本当に子どものような人です。そして元気のいいのにはこちらもかないません〃と奥さまは静かにほほえみながらおっしゃいました。

こんな有名な方の作品を表紙にいただけたことを心から感謝しつつ、一筆書かせていただきました。

（赤間）

幼児教育に〝ゆとり〟と〝ゆめ〟と〝ゆたかさ〟を

――巣立つ者へのねがい――

松　隈　玲　子

前号まで四回にわたって現代の幼児教育に最も必要であると思われる「ゆとり」と「ゆめ」と「ゆたかさ」についてのべた。

時間のゆとり、目標のゆとり、心のゆとり、からだのゆとり、そしてゆめとゆたかさについての考察をすすめるうちに、これらのものは個々別々に存在するのではなく、相互にかかわりあいをもちながら育つものであること、同時にまた子どもと保育者とのかかわりの中で深められ、たかめられ、あるいは失なわれるものであることが明らかになった。

「ゆとりある保育」は保育者と自己とのかかわりかたにおいて生み出される。即ち保育者が幼児教育に対して、それ以前に一人の子どもに対してどういう教育観、世界観をもっているかということがキーポイントとなる。

ひとりの子どもとの「出会い」それが人間教育においてかけがえのない意味をもつものであることを考える時、子どもにとって最初の出会いとなる母親とのかかわりあいの大切さはいうまでもないが、はじめての集団教育の導き手としての保育者との出会いもまたおろそかにはできない。

以上により、表題についての論述の結びとして、保育者養成にたずさわる者の立場から時を経ずして保育の現場めざして巣立ちゆく多くの学生諸姉に対して、このような保育者になってほしいという願いの若干をのべてみたい。

○母親と共に重荷を負いあう保育者に

これは十数年前、津守真先生の講義の中で教えられたことばである。講義の内容の大半はノートを開かなければ思いおこすことが出来なくなりかけた現在においても、このことばだけは私の心の中に生きつづけ、折にふれて学生と共に「重荷を負い合う」とはどんなことかについて考えてきた。今年もまた、このことばを保育者めざして巣立つ日まじかな学生に対する唯一のはなむけのことばとしておくりたいと思っている。

「重荷を負い合う者」語るには何と美しいそして実際に行なう

にはなんと難しいことばであろうか。

巣立つ日、卒業生一人一人に「母親と共に重荷を負い合う保育者であれ」との祈りと願いをおくる時、心に深く思われることは「私自身はどうであったか」という反省である。

この学生との出会いの日から二年間、学生と私とはどういうかかわりあいをしてきたか、「共に重荷を負い合った」ことが幾たびあっただろうかと考えるたびに、このことばが私自身の心の痛みとなってあざやかに刻みこまれる。そしてそのたびに幾分かでも救われる思いになるのは、学生たち同士お互いの重荷を負いあい、よろこびをわかちあったその時々の姿を思い浮べることである。

ピアノの遅れに悩む友だちの心の痛みを自分の痛みとして、放課後遅くまで練習の相手となり、卒業判定試験に合格できた日、自分のこと以上によろこんで涙を流していた学生、幼稚園実習で幼児との対応に自信をなくし気落ちした友をはげまし、何度も自分たちが幼児の役割をとって実習のリハーサルをして心の支えとなってあげたグループ、在学中交通事故で入院した友のために講義ノートを写し、毎日説明に通いつづけた学生等々、その一つ一つを思いおこすと、こうした友だちに対する暖かい思いやり、共に重荷もよろこびもわかち合うゆたかな心情は、やがて学業や技能の習熟をこえて子どもの心を理解し、母親と共に歩もうとする保育者となる素地をつくり出すものとなることを信じたい。

そして近い将来、幼児との出会いはその子とかかわりのある家庭をも含めた出会いであり、幼児の入園は、同時にその父母の入園でもあることをしっかりうけとめることのできる保育者に育ってほしいと願いたい。

また担任した子どものことについて母親と話し合うとき、「この母親の重荷は何であろうか」「私はほんとうにこの母親と共に重荷を負い合っているのだろうか」とたえず自問自答し、うまく面談が成立して対話がスムーズにはこび、助言が信頼をもって受け容れられた時、「この面談は成功した」と思い、そこで相談を終了するのではなく、「相談のテクニックのみの成功ではなかったか、母親が受け容れた私の助言は、ほんとうに子どもの立場を中心に、子どもの幸せをねがって、しかも母親の立場を理解し悩みに共感した上での助言であっただろうか」と常に自分を省み、その場かぎりの助言、面談でなく、出会いの日から卒園の日まで、あるいは卒園の後までもその子と母のことを思いつづける保育者であってほしい。

○子どもと共感できる保育者に

子どもと共感できるということは、子どもをよく知り、子ども

の立場にたてるということに他ならない。

「先生おはようございます」という一斉に揃って言えた朝のあいさつの調子よさを大切に思うのではなく、今朝登園した子が帰園の時まで、どういう人や物とのかかわりあいをむすんでいくか、「めだつ状況をになう子」「めだたない状況をになえる子」それぞれの特徴をもつ子どもたち一人一人が思ったこと、願ったこと、感じたこと、行なったことの一つ一つをその子の立場にたってうけとめることを大切に思う保育者でありたい。

経験による保育の流れや、集団の統一の中に安定を計ろうとするのではなく、個々の子どもの小さな成長の節をみのがさず、共によろこぶ時を大切に思いたい。

はじめてつみ木が高くつめた時、友だちよりもかなりおくれても一生懸命とりくんだ工作ができ上った時、ブランコが高くこげた時、いつも登園の遅い子がはじめて早くきた時、苦心の末、砂場のトンネルが開通した時、それぞれに子どもの心にあふれるよろこびを自分のものとしてうけとめよろこびをわかちあえるものとなること、このことが、いわゆる見ばえのする保育を行なうものとなることよりも価値あることに気付いてほしい。

○めぐみを伝える保育者に

「恵みの中にある自分」をはっきり認識し、ありがたいと思い、感謝の心を育てる保育者であってほしい。

「神のめぐみ」「仏のめぐみ」あるいは「自然のめぐみ」それぞれのうけとめ方があろうが、私が健康に生かされているそのことに対しても、私にかかわる数限りないめぐみをぬきにしては考えることができない。

人間のからだのしくみの何にもくらべようのない精巧さ、動物や昆虫の種族保存のための本能の不思議さ、生態系の神秘さ、そして水の循環、自然界の法則と秩序など、どの一つをとりあげてみても人知ではとうてい計り知ることのできない思いにみたされる。

人間が生きていくのはあたり前であり、生きるためにできるだけ便利なようにまわりのしくみを変えていこうと考える前に、特に幼児期においては、めぐみを教え、めぐみに感謝することのできる人間性をしっかりと育てるものでありたい。

○物にきびしく、人にやさしい保育者に

我々はともすれば人にきびしく、物に対しては安易な妥協をすることが多い。努力すればできる能力のある子が、その場かぎりの発言をしたり、製作物をつくってきた時「仕方ないけどいいことにしてあげましょう」というのはほんとうの愛情とは言えない。もちろんなぜ充分能力が発揮できなかったか、その子にどう

いう力（例えば早く遊びたいなど）が働いたかを知ることの大切さは言うまでもないが、その子自身も満足のいくものと思っていないようなものを保育者がみとめたり、ほめたりすることに安易であってはならない。むしろこのことを通して保育者と子どもとがより近くなり、共に考え、はげましもう一度やり直そうとする意欲を育てることにより、その子の能力を充分に発揮したものとなった時、その努力と発言や作品のたしかさを適切にほめるものでありたい。しかし、最初の時点で、そのことができなかったからといって、その子全体がだめな子であるという人に対する評価を行なうことがあってはならないと考える。

食品公害はもとより、真に子どもの立場にたって製作したとは思われない文化財、遊具、玩具、衣服、TV番組、絵本雑誌などのはんらんする現在、保育者は子どもに与える「もの」をえらぶたしかな目と、外観や、便利さにまどわされないきびしい心をもつものでありたい。

慎重に吟味して遊具を購入し、その用途については、子どもに危険性のない限り、子どもの自主性と創造性を主にして考えることが大切であり、安易に購入した遊具に対して、やたらに規制のみ多い用い方を子どもに強いることのないように心がけたい。

。よいと思ったことを子どもの前で明らかにしていく保育者に

保育者は子どもとの日々のかかわりの中で子どもから多くのものを学んでいく。子どもによって気付かされ、子どもに教えられたことを子どもに明らかに示したい。そのことによって子どもは幼児教育の大切さを自分自身のものとして育つことができる。

子どもがこうだから苦労した、こんなことをして困ったというのではなく、その時に自分は子どもとのかかわりの中でこんなことに気付いた。子どもにはこういう言い分がありもっともだと思った、そしてその際にここが一番大切だと思ったということを明らかにしていきたい。

紙面の都合上意をつくせないが、幼児教育論として第一稿をふみ出したものの、論じていくうちに、幼児教育者論としての思いをつらねてきた。

幼児教育はその教育をする人の問題にかかわる面が大きく、幼児教育にたずさわる者はいかにあるべきかを考えてみることも意義あることと思われる。幼児教育者、それ以前に人間としていかにあるべきかを省みるとき、これまでのべてきた幼児教育における「ゆめ」と「ゆとり」と「ゆたかさ」の教育論が、何らかのプラスとなっていかされることがあればとねがいこの稿をとじたい。

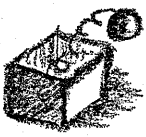
（おわり）

（西南女学院短期大学）

こすもす保育園見学日誌　その二

――絵本をよむ――

竹田都志子



一月二十九日

私は、保専の新米教師である。勉強のためある保育園を見学させていただいている。そして、今日からは、絵本の読み方を中心に勉強に伺うことにした。

園庭に入っていくと、ひとりの男の子が、嬉しそうに「ぼく、パン今日持ってきたの」と話しかけてきた。「そうお、いいわねぇ、ママが入れてくれたの？」「ううん、おばあちゃん。ママ死んじゃったあ―」

ママがいない悲しみを、まだそんなに身にしみて感じていないのが、かえってかわいそうだった。

のぶみつ君が遊動ブランコからまっすぐ走ってきて、「おばちゃん、まもる君が、まこと君のおなかけっちゃって、まこと君泣き出しちゃったぁ」と救いを求めてきた。

でも、さっきから、何が原因か、まもる君をいじめていたみんな。「どうしてまもる君も一緒に入れてあげなかったの？」「だってこれだけも、これだけもいたもの」と指を四本伸ばしてみせる。

「まこと君に『歩ける？』ってきいてごらん」と言うともどって行った。でも不安らしく誰か保母さんがいないかと見回して、あきらめる。五分程して、帰ろうとする私に、のぶみつ君がどこからかかけてくる。「あのね、まもる君が、まこと君にあやまったけど、まこと君まだ泣いている」「そうお」「これ、誰か破いちゃった、きのう、先生が折ってくれたのに」「そうお、せっかく折ってくれたのにね」と答えると〝せっかく〟ということばがわかったらしくうなずく。そして長方形に破られた色紙をパンパンと鳴らして遊ぶ。

いた、いた、三歳児組の明るい先生が。頭を下げると、向うからやってきてくれる。

「居残りさんの時、来て絵本を読んでやってもいいですか？」ときくと、嬉しそうに笑って「園長先生か、主任さんにきいて下さい。私ら、こんなもんで」と、手で低い位置を示す。

三・四歳児組の、のぶみつ君でさえ、しばらくして思い出した私の顔を、知恵遅れのA子ちゃんは、まっさきに寄ってきた。

「おはよう」と言うと、嬉しそうに、本のグラビアの切りぬきをポケットから出してみせた。それは食器のグラビアのページだった。「きれいねぇ、いいわねぇ」と言うと得意そうに何か言って広げてみせたりした。

でも、私の方で知恵遅れの……という先入観があって、寄ってきてくれたことを感激したり、何と答えようかと考えて、かえってスラスラと言葉が出なく、A子ちゃんは、手をつないでいた同じ組の女の子と行ってしまった。

二月十三日　夕方

残留保育児の絵本のことを主任さんと、園長先生に許可を受ける。園長先生はニコニコと許して下さる。

夕方の園庭、雨が少ないこの頃、乾燥した泥で遊ぶ子どもたちは、ほこりだらけ。でも、これが子どもたちの姿だ。

三歳児組の仲良しになった保母さんに、〃絵本を読んでやることが許可になった喜び〃を伝える。彼女は、「絵本を読んでやると言っても、むずかしいですよねぇ。こう（横に）持って読んでやっていいのか、暗記して、こう（前に）持って、子どもたちの顔を見ながら読んでやらなきゃいけないのか？　園では、下読みする時間ないし、家に帰れば夕食、風呂入れ、後片づけ、そしてちょっと自分の勉強をと本を開くと主人はこんな顔（しぶい顔）するし、みんな同じよねぇ」と、現場の嘆きを話してくれた。

残留保育児といっても、みんな元気で外で走りまわっている。チラチラと見ると、一番年長組で、女の子二人、男の子一人が折り紙などしているだけだった。

これじゃ五・六歳児用の絵本を持ってこなきゃ駄目だな、そして雨の日に三歳児や四歳児を……初めは絵本を横に持つも、前に持つもない、机の上に広げて、まわりを囲んで、二、三人にのぞかれて読む位だなぁ……と思案した。

三月五日（水）　くもり（夕刻雨）

今日は天気予報があたって、小雨が二時頃から降り始めた。会議も早めに終った。今日は絵本を読んであげられるチャンスだ！と思い、私は上司に許可をもらい、期待と、初めて子どもたちを前に絵本を読む不安とで胸がいっぱいになり、まるで実習生のよ

うな気持で雨の道を園に向った。

保育園の門をくぐると、まだお帰りの最中だった。オルガンの音が聞えてくる。ひとり雨をよけて待っていると、お迎えに来たお母さんが寄ってきて、私を母親とまちがえて、いろいろ話しかけてきた。

お帰りはじきに終った。ガラリと保育室の戸をあけて、三歳児クラスの私と仲良しになったのぶみつ君が顔を出した。

「あれ―、きのうの先生が来ている！」「みなにご本読んでくれるんだってよ」と保母さんが言ってくださる。のぶみつ君は、私にスリッパを持って来、（ア、夢中になり、スリッパ忘れちゃった）かわいく私をせかせた。「レインコートは、お部屋に入る時はぬがなきゃいけないのよ」と言って待たせながらぬぎ終ると、うけとり「かけてくる」と、せっせとコートかけに持っていってくれた。

サア、仲良しになった三歳児クラスの保母さんが、保育室の床に毛布をしいてくれた。その上に、子どもたち十人位が座った。

保母さんに、今日持参した二冊の絵本をみせた。三歳児からと裏表紙にかいてある〝ゆかいなかえる〟と、四歳児からという〝シナの五にんきょうだい〟である。

「三歳児組でも、もう三月、ほとんど全員が四歳になっていると思って」と言うと、保母さんは「ギリギリですね」とおっしゃった。そして私の持っている二冊をみて、「あっ！ こっちですね」と〝ゆかいなかえる〟を指していわれた。また最初に〝ぐりとぐら〟ですか？ ときかれた。私もその題名はよくきくが読んだことはない。ぜひ読まなくちゃと思った。

サア、子どもたちを前に、私も毛布に腰をおろそうとしたら、保母さんがさっと椅子をくれ、「後の子が見えないでしょう」と言われた。聴きとれる隊形なんて、本を読んできながら……とまず失敗。

初め保母さんの言われるとおり、〝ゆかいなかえる〟を読んだ。表紙をめくると、見開き一杯にかいたおたまじゃくしをみて、「ア、かえるの子！」と叫ぶ。「そう、おたまじゃくしね」と言い、いつのまにか私はページをおいながら、榛読みでなく、合の手を入れ、「さぁ、どこにかくれるかなあ」と、興味をひく言葉を入れざるを得なかった。

途中お迎えがきて、一人、二人、子どもたちが欠けていった。しかし「あ！ あそこにかくれている」という風に何とか反応はあった。

ただ、あんなになついて迎えてくれたのぶみつ君が、机にのぼって、「ちぇっ、読むの下手なの！」とかなんとか言っている。

「のぶみつ君、そこで見えるかなぁ」と言いながら、彼の批判には笑って答えてすすめていった。

さて「もっと読んで」と言われたので〝シナの五にんきょうだい〟を読んだ。四歳になっているとはいえ、三歳児クラスでは、三月になってもまだ無理だった。途中から特に、文をそのまま読むのをやめ、はしょって、要点だけ言ったのであるが、〝さいばん〟を「いいことか悪いことか、みなで相談すること」という風に、言葉も代えて言わねばわからないと言った。そしてアクビする子もいた。また、五にんきょうだいがそれぞれ特徴を持っていて、死刑をまぬがれるというおもしろさが理解できてないようだった。

のぶみつ君については、保母さんは「外で遊ぶのは好きだけど、集中力のない子で」とまゆを寄せた。私は単純にかわいいと思っていたが、生活全般をみる保母さんには全く違った評価が生まれるのだなぁと反省した。

さて、三歳児クラスでは〝シナの五にんきょうだい〟はあまり大きな反応がなかったので、それでは、今日受け持ちの先生がお休みの、四歳児組で読んでみたら……ということになった。

四歳児組の保育室に入ると、五歳児担当の増田主任が、子どもたちをブロックで遊ばせていた。子どもたちはみな一生懸命に遊んでいるようにみえたので遠慮すると、「じゃあ、そこにウロチョロしている子たちに読んでみたら」とアドバイスしてくれた。なる程、落ちついてよくみると、二、三人、女の子が手ブラだ。そこでその子たちに読んでやろうとすると、三歳児組で一番前にいて、しきりに反応を示していた男の子がまた来て横で聞いていた。四歳児組の女の子たちはおとなしかった。だから、反応は三歳児組と「違うでしょう」と言われても、はっきり答えられなかった。やっぱり五にんのきょうだいの特徴と、裁判のとり合わせの面白さは、さして感じてないようだった。

「どんな話?」と〝シナの五にんきょうだい〟のあらすじをきいた主任さんは、私を五歳児組へ誘ってくれた。「今、本読んでるよぉー」なんて答えている男の子もいたが、何か主任さんがおっしゃると、みんな粘土遊びをやめ集まってくれた。(下駄箱の中にくつがきちっと並んでいたクラスである。)集まってと言うと、何ときちっと二列に並んだのである。「さあ、もっとこっち三人位になって前の方へ」と促すと、「三列!」なんて男の子が叫んでいた。

さあ、ここでは反応は大あり……。

「えぇ! 首が鉄でできてる? ロボットみたい。えぇ! 海の水を全部飲める? あんな塩辛いのを?(全部飲めるというお

かしさは指摘しなかった。）えぇ！　全然燃えない？　そんなことってある？　えぇ！　足がのびる？　……など。

そこで私は、このクラスでは話ははしょらず、文をそのまま読んでやる方がよいと感じて、くわしく読んでやった。子どもたちは原文の文学的表現を楽しんでいるようだった。念のため、一、二か所ことばの意味をたずねてみたが、意味もよく知っていた。そして、裁判ときょうだいたちの特徴のかけ合いの面白さも理解しているようにみえた。

三歳児組では、集中すること自体困難であったのが、この五歳児組では、何の苦もなくよく聞いてくれた。終ったら拍手もしてくれた。つまり、これは年齢のせいか、担任の保育も影響しているのか、場数の少ない今の私ではわからない。が、五歳児とはいっても「へえー、ぼくシナに行ってみたいなぁ。首が鉄だったり、あんなに塩辛い海の水を飲んだりする人がいるところに行ってみたいなぁ」とまだ実念論の世界にいて無邪気だった。

その、こうじ君という最前列にいた本の好きな男の子が、この絵本を貸してくれといって、自分で読み始めた。すると別の男の子が園にあるぶ厚い物語を持ってきて、よんでくれといった。こうじ君は、「いいよ、そこで読んで。ぼく小さな声で読むから」と優しかった。しばらく読んで五時すぎ、こうじ君が読み終って返してくれたところで、読んでほしいといった男の子も「ぼくもいいよ」と言ってくれたので帰ることにした。

「反応はどうでしたか？」と保母さんにきかれ、「はい、よくきいてくれました。こうじ君は貸してくれといって、自分で読んだりして」と答えると「こうじ君は本読むの好きだから。でも少し、だらしないんですよ」とまたもまゆを寄せた。

私の好きな子は、どうして担任の先生には嫌われるのかな？（担任の先生に嫌われている子が、私に救いをもとめて甘えてくるのかな？　でも、ただ甘えてくるから……だけではない優しさ、かわいさがあるのは？）

三月二十日（木）　午後から雨

二時頃から雨になった。「絵本を読んであげられる！」私は上司に許可をもらうと、保育園へとんで行った。今日は〝これを読んでやろう〟と胸ふくらませて……。保育園は保母さんたちが、せわしげに机を運んでいた。なじみの保母さんが、「今日は卒園式の準備で」と叫んでくれた。「アー、五歳児組の、あの本が大好きなこうじ君にインタビューすることもできなくなった」私は、がっかりした。

四月八日（火）　雨

仲良しの三歳児組は四歳児になった。

雨！　朝から雨。今日は子どもたちに絵本を読んであげられると心はずむ。学校でちょっと仕事ができたけど、許可をもらって保育園へ行く。激しい雨だった。

もと三歳児組の仲良しになった保母さんの顔がガラス戸越しに笑う。ガラリと出てきて下さる。「今日も絵本持ってきました」と言うと「じゃあ、お帰り、今すませちゃうからね」とのこと。外でとしふみ君がすねている。「すねちゃったから（？）入れないように鍵かけといたの」とのこと。外で遊ぶ時は、のぶみつ君と並んで、私によくなつく子だった。それが担任の保母さんにたずねるといたずらっ子で「一番！　双璧！」とのことだった。子どもを前にして平気で悪い子という母親がいたりするけれど、子どもに愛情こめて、「一番！」と笑う保母さんだった。

さて、また、保母さんが毛布を持ってきて下さった。先生用の高い椅子に座って、参考書にあったように膝の上に絵本を固定して、読み始めた私に、「見えない！　もっと、高くして！」「高くして！」と声がとぶ。私の頭位に高くするとやっといいという。五人位ずつ三列で十五人位の集団なのに両端が見えないという。今思うと、もう少し、最前列の子より下がって、一番前の子との間をあければ良かったのかとも思う。そうすると最前列の子が、あんなに首を曲げることもなかったのだ、失敗！　失敗！

絵本は、〝ぐりとぐら〟二回読まされる。一人二人の女の子の「もっと読んで」の声に誘われて、二冊、二回ずつ、計四回読み終った頃には、おとなしく座っているのは二、三人だった。毛布の上であばれ始めた男の子たちは、もう部屋中をかけめぐっている。〝八分に声をおさえて〟なんて参考書に書いてあったことは駄目、騒音の中で聞いている女の子たちに聞えるようにと声を高くした。

さて、絵本が終った四時頃から、ブロックで子どもたちと遊んだ。〝かうちゃん〟と自分のことをいう女の子が抱きついてくる。「抱いてもいいんですか？」と保母さんにたずねると、「いいですよ、好きなように」とのこと。抱いていたが、時々、他の子が「赤ちゃんみたい」という。でも抱かれて、「あったかい」という。あまり抱いていたので疲れた私は思わず「かうちゃん、赤組（三歳児）みたい」と言ってしまって、反省する。保母さんの前で恥しいと思った。

また、今日、外に立たされていたとしふみ君が、どうも荒れている。この前の絵本の時はおとなしく、となりの組までついてきて二度もきいたのに、あばれている。ブロック遊びでも、女の子

のをこわしたり、私をけったりする。そこで少し肩車したりして遊んであげた。すると（自画自賛か）ちょっと荒れたのがなおったようだった。

保母さんは、かうちゃんに、かうちゃん今日、久しぶりに甘えられて良かったねぇと言った。おや！　しばらくしてみると、かうちゃんは指をしゃぶっていて、チラリと、タコができているのが見えた。「アラ！　ちょっとみせて」と言うと、くすくす笑って、手をかくす。でも見せてもらうと、ほんとに関節のところにタコができている。

かうちゃんは、五時半まで一人残る。ママは先生だという。黒板にお姫様と王様の絵をかく。頭足人間なのだが、顔はとてもくわしくまとまってかいている。ふさふさした髪に冠をかぶっている。保母さんは、「かうちゃんは、しっかりした線の絵をかく」という。でも左手でかくという。「かうちゃん、お手々違うよ！」と保母さんに声をかけられふり向いて、笑って、右手にチョークを持つ。

五月十六日　雨

今日は、〃絵本の絵を、子どもたちが、まずながめる時間を与えてから、文を読み始めるよう気をつけよう〃と心して出かけた。

もう一つ、縦型の本は、体の横に持って、横長型の本は、膝の上において上から字を読むといいようだ。

また、ページをめくるのは、横より、上か下の角が良いようだ。

あまり声色を使っておもしろげに読むと、絵より声色の方に注意が向くようだ。（しかし、最近の子どもはオーバーに読まないと集中しない……と主任さんは話して下さったが。）

昼近く、空が明るくなって雨が上った。自由遊びの時をみはからって、園に電話をする。

「雨があがれば下はぬかるんでても、外で遊ぶのでしょうね」

「はい。できるだけ外で遊ばせたいもので。また、雨の時、お願いします」と、アッサリ断られてしまった。残念でした。

しかし、夕方、また降ってきた。私は喜びいさんで園へ出かけた。するとまた、着く頃雨があがってしまった。笑う私に、仲良しの保母さんは「工事中でうるさいもんで、外で読んでやるならいいですよ」という許可、ほんとに細い霧雨の中で、私は平均台に腰かけて、集まった園児たちをしゃがませる。

初めに〃かばくん〃を出す。「みんな動物園でかばみたことある？」なんて質問に「ハーイ」と答える。やっぱり四歳児になっ

ても、いろいろ興味を誘う言葉が必要のようだ。

〝きつねとねずみ〟は、「ねずみ！　穴ほるの？」なんて疑問がとんだ。

前の方に立つ子がいて、「見えない」「見えない」とケンカする子も出、泣く子まで出る始末。でもそういう中でも大部分は聞いてくれた。

短かいお話の二冊だが、「もうおしまい」というと、いたずらっ子のとしふみ君が、スーとひざの上にのってくる。しばらくなすがまま抱いていると、やがて友だちに誘われて遊びに立って行った。

お話が終った頃、集まっていた子の顔をみると、知恵おくれのA子ちゃんが嬉しそうにしていた。

五月二十二日(木)　晴

先日、外で読ませてもらったので、これからは、晴雨にかかわらず読む機会があると思い出かけた。

門を入ると、四歳児組のいつもの子どもたちが、「来たー、来たー、来ましたよ」「おばちゃーぁん」「おばちゃんだって？」とにぎやかなこと。「お帰りしてからね、待ってるから」と言うと部屋に入る。

お帰りが終ると、走ってきた、きた。園庭の隅の平均台の後で、〝どろんこハリー〟を読む。しばらくすると、最年長組の子などが二、三人、前に来て立つ。すると「見えなーい」「見えなーい」と例によってにぎやかになり、私が立つ子を座らせていると、おや、まあ！　真中で座っていた子どもたちは、泥あそびを始めた。こりゃあ、立つ子なんて、子ども同志にまかせといて、私は読まなくちゃあと次を読む。すると声を聞いて、泥んこ遊びの連中も、絵本を聞き始めた。

読み終ると、あの乱暴ナンバー・ワンといわれたとしふみ君が、にゃと笑って、私の手から絵本をとる。「いいよ、あとで返してね」と言ったものの、なぜ取ったかわからなかったが、彼はその場で、自分の膝の上に絵本をおいて、一ページずつめくっては絵をながめていた。そして、おわりまで見ると、「はい」と返してくれた。

としふみ君は、「また雨の時来てね」と言う。「雨が降っても、お話し合いがある時は来れないの」というと、「あしたも来て」という。「毎日来れないの」というと、「じゃあ、あしたの次の日来て」と言う。「あしたの次の次の次の次の次しか来れないの」というと、ちょっとがっかりした顔をして、「肩車して！」とのぼってきた。女の子のかうちゃんも前からしがみつく。「順番！

順番！」と言うと、思いがけなくみな納得した。小さい時から保育園にきてるから、もう四歳児組の五月で、順番を守ることができる。（それとも、当然かな？）

としふみちゃんを何回か（園庭の端から端までが一回、約四十メートル位）肩車して、かうちゃんもおんぶして、ひろ子ちゃんもおんぶして、名前のわからない女の子二人位もおんぶした。例によって、としふみちゃんはしばらく甘えると、また他の子との遊びへ出かけていく。

「ひとつ、ふたつ、と数えて、とおまで」と言うと、かうちゃんもサッサとおりる。さんざん四、五人の女の子を順におんぶして、新顔がまた来たら、何と甘えんぼのかうちゃんが、「いいよ、私、もうたくさんおんぶしてもらったもの」と遊びに行く。

満たされると満足するとは、このことだなぁと思っていると、ひろ子ちゃんのママが、お迎えに来た。かうちゃんは、いつも五時半のお迎えだ。うらやましいのか、淋しさが湧いてきたのか、かうちゃんはまた甘えんぼうのかうちゃんにもどって、「おんぶ」と言ってきた。かうちゃんと遊動ブランコに乗る。二人で揺れていると、保母さんが「いいわね」と言って通りすぎる。年長組の女の子が一人「乗せて！」とくる。同時に知恵おくれのA子ちゃんが来たので「いらっしゃい」と言うと、かうちゃんも年長組の女の子も席を空けてのせる。別に、子どもたちに偏見は生まれていないようだ。

やがて、またお友だちにはお迎えが来て、かうちゃんは甘えだす。「甘えん坊さん！」と、私が呼びかけると、「おばちゃん、もう、帰れ！」と言う。「ハハハ。あんな意地悪言ってる」と相手にしないで、（一瞬、帰ろうかと思ったが、こんなキッカケで帰ると、なめられると思いなおした。）かうちゃんに背中を向けると、すっとおぶわれた。「ジャングルジムへ行こう」と言う。閑散としてきた園庭で、一人ジャングルジムにのぼって、見ている私に、いろいろ言いう。しばらくして（五時頃）「おばちゃん、帰ろうかな」と言うと、「帰る？」と素直にきいてついてくる。むこうで庭掃除していた保母さんたちが、早くも気づき、「かうちゃん、園服着て、すみれさんで待ってな」と呼ぶのに反対方向に走り出す。なんと木陰においてた私のかばんを取ってくれたのである。

保母さんたちは、口々に「ありがとうございました」と言ってくれる。私は「いいえ、どうも」などと言いながら帰る。私こそ、勉強させてもらったのだ。そして感じたのだ。母性が尊いと同じように保母の仕事は、大変な仕事だということを。

（静岡県立厚生保育専門学院）

「日本幼児保育史」研究余滴（二）

長　玲　子

雨の上った六月の夕べ、保育史の出版記念祝賀会の一ときを、私は、十余年の「時」をタイムマシンで戻って来たかのような、夢のような気持ですごしました。山下先生の御挨拶、村山先生の経過報告が岡田先生の司会で進む間、私が抱いた感慨は、諸先生方とは別のものだったと思います。二十年に及ぶ息の長い研究を、御多忙の中でなしとげられた先生方の御苦労と充実感は、私などと比較出来ないことと思いますが、平凡な一学生であった自分が、その中に加えていただき、ささやかな発掘をなし得たのかもしれない……と胸に溢れるものを感じないではいられませんでした。「私の青春は、この保育史の中に残っている」等と多分の感傷にひたったのも、十年も先生方とお目にかかる機会さえなく、三児の母親としての煩雑な日常生活にのみ追われている現在だからかもしれません。

ですから、この原稿を書くにあたっても、ためらいがありました。研究の苦心談、というより、どうしても、私自身にとって保育史の研究がどんな意味をもっていたのか……ということになってしまいそうで。が、研究につながることならなんでも……とのことで思い切って筆をとりました。

◇　◇　◇

日本女子大児童学科の三年生の終り、卒業論文のテーマと指導教授を決める折、村山先生の研究室に伺ったことが、幼稚園史研究にたずさわったきっかけになりました。何より、こまかな統計や数字が苦手でしたので、心理学のテーマをさけ、「児童観の変遷」を勉強したい旨お願いに上りました。先生がさり気なく、「ギリシャ、ラテン語がわかるといいんですがね。せめてペスタロッチやフレーベルの原著が読めると。僕には自信がありませんが、あなたは出来ますか」と仰言ったのにびっくりし、三十分後

に退室する時は、「幼稚園の歴史的考察」ということになっていました。息ごんでいたのに、いつの間にかテーマがかわり、その上たくさんの幼稚園に関する参考書を拝借するはめになって、数か月は仕方なくそれ等を読みつづけました。その間、保育史の小委員会のことを伺い、「幼稚園史は、専門の先生方が手分けして目下研究中な程よくわかっていないので、ほんとの第一歩から」と、いよいよテーマは「初期の幼稚園」にちぢめられてしまいました。（何しろ、指導教授の仰言ることは絶対だと信じこんでいましたし、先生方にさえわかっていない、とあっては学生としてはいたしかたありませんので）初めの意図と違うので、どうも心ひかれないまま幼稚園教育史をつめこむに従って、その歩みは、明治維新の中から生まれながら、小中学校と別種のものではないかと考えはじめました。各地での生まれ方、育ち方が、各々違うらしいのに、倉橋、新庄先生の著になった「女子師範幼稚園」以外は、あまりはっきりしていないのではないか、関西の地に育った幼稚園の方が大きな意味をもつのではないか等と気づきはじめました。おそるおそる先生にそれを申し上げると、先生は資料を求めて関西の古い幼稚園を廻る御予定で、お伴してもよいとのこと、秋休みを利用して、七時間の旅をしました。この時、「学生は、論文など書こうと思わないでいいんですよ。学問のし方、態度だけ学べればいいのです」と言われて、目からウロコが落ちた思いでした。生涯、覚えていようと思いました。

◇　◇　◇

伊勢湾台風の直後で列車の窓から水につかった屋根の上の人々や、牛や豚の死骸をみたのも昨日のようです。山科の御親戚からの先生と、豊中の従姉の家からの私と、毎日十時にデイトして夕方まで、あちこち歩き、夜は写した資料の整理という五日間でしたが、その結果が、愛珠幼稚園と柳池幼稚園の姿を浮かび出させてくれました。その頃の日記にこうあります。

「十月一日。十時、淀尾橋北口改札口。ビル街の中に、武家屋敷のような瓦葺の幼稚園におどろく。津村園長が、歴史に興味をもたれ、何年かかかって大変よく整理された貴重な資料を、先生と書庫にこもって写す。先生が『あれも』『これも』次々ひき出していらっしゃるのを、一字でも多く、とただ写す。当時の人たちが、いかにつよい理想にもえてここに幼稚園を開こうとしたかを、『明治十三年』等という虫喰いの著に知って感動する。

二日、三宮ホーム。頌栄幼稚園と神戸幼稚園。静かな山の手の街。私にははじめての神戸だが、ただただ先生と頌栄女子大の図書室にて写す。キリスト教系の資料多い。

三日、六甲駅ホーム。六甲登山の一団をみながら、六甲幼稚園と、その昔スラムに建てられたという善隣幼稚園を訪ねる。どちらも戦災にあって新園舎になっている。

五日、再び愛珠。『僕はへたですから』と先生に言われ、きらいな絵だが遊具など描く。掛図、カルタなど手製の色彩はまだ美しい。夕方、松蔭女子大の西本先生にゼンザイをごちそうになった。やっとほっとした一とき。

六日、先生は柳池幼稚園にまわられるとのことだが、さすがにつかれて、ご勘弁願う。帰京したら、疲れが出て、二日間ねこんでしまう。」

私にとって、はじめての研究旅行は思った以上の疲労でしたが、生の資料に接した感動も大きいものでした。愛珠、頌栄の整理をして登校した日、「いいものをみつけました」と先生からぶ厚い風呂敷包みの中をみせられました。柳池幼稚園の三十～三十二年の保育案や、三市連合のパンフレットの綴りで、これらを見たとき、私の中に、本当に一生懸命とりくみたい、という気がおきました。「柳池で、これ等が屋根裏みたいなところに無雑作にあるので、散逸すると困ると思って借りて来ました。黙って持って来てしまったのもあるので大急ぎで写して返しなさい」と声をひそめられたのを覚えています。丁度その頃、女子大にコピーが入り、当時は新式のそれに大勢が殺倒しましたし、「保育案」はいつ返却を催促されるか気が気でなく、早く登校したり、夜遅くなったりで、先生と作業しました。

水にぬれて出て来る毛筆で細かな絵まで入った保育案をあちこち干し歩き、数冊分がコピー出来たときはほっとしました。それ等をにらみながら、当時の保育の様子や保母たちの意図した事、子どもの反応等々、何か少しでも多くをさぐり出したいとミステリーを読むような心の昂りさえ感じたことをなつかしく思いおこします。先生は、あくまで資料を先入観をもって扱わない事、必ず、数字を使って説明出来るように整理することをきびしく言われましたので、「説話」の回数や、それが展開されて手技や遊嬉にどう扱われるか「正」をつけたり、ソロバンをはじいたりが続きました。何とか保育の様子をすっきり表わしたい、保育内容の変化も、恩物が減り、唱歌や遊嬉が増加していく様子を数字で示してみたい、と頭をいためました。今まで、著書を読むだけではなぜかはっきりしなかった「初期の幼稚園の姿」が、いつしか私の中に形をとって来て、愛珠幼稚園や柳池幼稚園の保育の様子が目に浮かんで来るような気がしました。遠い明治の初めのころ、ランプの下で、細い筆の先でこれらの保育を記した束髪の保母たちが語ってくれることをつかみとろうとすることは、本当に楽し

くなり、幸せな気持さえしました。とくに、関西の気風、民衆の気慨のようなものに興味を持ち、また感動させられました。お茶の水幼稚園が恵まれた官製の優等生なら、愛珠や柳池はなんと逞しい臨機応変の姿だろう、と目を見張る思いでした。町の人々の非難や誤解をとくため、お稲荷さんをまつって拝んでみせた愛珠創設者たちのしたたかさや、大型積木や砂袋を遊具として開発していく様子に、「明治時代は堅くるしく不自由の時代であり、女性はかよわかった」のではないことを教えられました。開設時は酒をぶらさげた人々が見物に来た愛珠幼稚園は十数年にして、木馬をそなえ、鉄砲ごっこをし、郊外遊戯を行なうようになるのを知って、そこで働く保母たちの努力と知性の高さを思いみる気がしました。ここでは、恩物はどんどん減り、「幼児には適せじ」として「読ミ書キ」は徐々にやめられるなど、思い切った保育が行なわれますが、その根底に、たゆみない保母の研究心と幼児を愛する心があったことを思わされました。交通の不便な時代に、「女子師範幼稚園」に学びに行き、やがて三市連合研究会を誕生させる、このような名もない現場の人たちによって幼稚園教育は培われて来たのだ——と、その素晴しさがわかったような気がしました。そして、関西の幼児教育は、この時代常に、十年、東京より進んでいたのではないだろうかと、後の三市連合研究会につながる動きを考えても感じさせられました。先生が、研究のはじめから、「関西」と何度も言われたことが、自分のこととして理解出来たように思います。

◇　◇　◇

研究、というより、一学生として、先生の御教示に従って資料にとりくんで来ただけですのに、それを機に、小委員会の先生方と同席させていただき、いろいろお教えいただいた事は、何より嬉しかった事です。大学の先生というのは、試験や卒論をパスさせて下さるか否かの鍵をにぎるコワイ方々でしかなかった私に、先生方の若々しい討論のご様子、新しい発見に喜ばれるお姿は、深く胸にのこりました。こつこつと、たくさんの資料に当っていらっしゃる水野先生、夢中になって目を輝かせる岡田先生、もの静かに、ていねいに教えてくだる津守先生、はじめてお目にかかった時は、まだ、大学院の学生でいらした宍戸先生が、「どうも僕は結論を出すのを急ぎすぎて」と苦笑していらした事など、今も楽しく充実した思い出になっています。

卒業後、幼稚園教諭として、第一歩を踏み出したのも、幼稚園史にたずさわった事とつながっているかもしれません。が、明治の保母のような素晴しさを自分の理想としながらも、ただ追われ

ていたその頃、先生からお呼び出しを受けました。小委員会の研究が「幼児の教育」に掲載されるので、私の卒業論文を新たな資料も加えて書き直してみないか、とのことでした。自信もなく、辞退したいのが本心で、ずい分ためらいましたが、「あの明治の保育案を陽にあててあげなければ……。明治の保母たちの姿を残しておかなければ」という気持ちが一方にあって、自分を励しました。それが更に「幼児保育史一・二巻」の立派な本に納めていただくと、私には光栄という以上に、自分の役目を果せてよかったという気がします。虫喰いのまま、散逸されたりしないで、後の人たちのために残しておけてよかった、とその機会を与えられた事に感謝しております。

たまたま、村山先生に卒業論文の御指導をお願いに伺ったことから（初めの意図とまるで違ってしまいましたのに）あまりにも多くの事を教えていただき、自分でも得る所が多かったのを幸せに感じています。いつの間にか、先生方に上手に乗せられ、先生の意図されたように進んでしまったのだろうか、と妙な気分にもなりますが……。

「ほう、僕は気がつきませんでしたが、どこにそんな傾向がありますか、もっと、はっきり探し出して下さい」「もっと、いろいろなことがわかりませんかねえ」と仰言られて頭をひねって伺ったときこう言われました。

「女の人は、年をとると良いおばあさんと悪いおばさんと二通りしかいなくなります。その別れ目は、若い時に、自分の頭をつかってどの位考えたか、疑ったり、抵抗したかです。知的なトレイニングを受けない人間は若いうちはカバーされていても、のびられませんよ」

「わるいおばあさん」になりたくない一心で、ない知恵をしぼった研究であり、私の中で一番充実していた数年間であったと、今しみじみ想いかえします。

◇　◇　◇

長々と、とりめもない思い出で紙面を汚しましたが、先夕の一刻もこのような感慨にふけっていました。十年ぶりにお目にかかった小委員会の先生方のお顔が、まぶしい思いでしたが、また、出来たら、「わるいおばあさん」にならないために勉強してみたい、などと心にきめたりいたしました。

★講演

これからの世界と日本の子ども（一）

矢島釣次

〈ご講演に先立って、東京工大の学生紛争の矢おもてにたたれた時のお話から、過労で急性歯槽膿ろう炎になられてお若いのに総入れ歯であること、ガラスで向うずねにけがをされ〝スネに傷をもつ男〟であることなど、きく者を適当に笑わせながら、あらためて学校教育を考え直すことの必要性をお話しになりました。〉

はじめに

私自身は戦争中、日本を、愛国者なるがゆえに追放されました。それは、物価統制令というのが昭和十四年に出ました。そうしますと、北海道から東京へ来るりんごも、青森から来るりんごも、長野県、ないしは朝鮮半島から来るりんごも全部十銭ということになります。そうしますと、遠くからはりんごは来ない、ということになります。りんごなら食べなくても戦争にことかきませんけれども、もしこれが、戦争に必要なものが、必要な数量だけ必要な場所に集まらない、ということになりますと、日本の戦争は大変なことになる、と実は私は中央公論という雑誌に書いてしまいました。そうしましたら、発売の翌日、私の家におよびでない方が見えて、〝日本列島を離れろ〟とおっしゃられました。そして私を昔の京城、今のソウルまで送って下さいました。列車はガラガラに空いておりましたのに釜山から京城まで、連結機の上に立たされました。そういう苦い経験を考えてまいりますと、いかに人間にとって自由というものが大事かということを、つくづく感じさせられます。よしんば三度の食事が二度にへらされても、私は自由というものが大切であるし貴重である、私どもにとって捨ててはならないものが自由である、と思います。

ただし、自由というのは、何をしてもよいというのが自由では

ありません。現在では、そういう考え方が一般に行きわたっております。権利義務関係、こういうものを考えてまいりますと、権利の主張は無限大です。人間の権利は憲法で保証されている……あれはうそなんです。多くの憲法学者が、憲法に保証されている基本的人権ということだけをいってるんです。つまり基本的人権というのは憲法に規定されておりますけれども、第二項に、この権利は公共の福祉、公益の問題に関して権利、基本的人権の存在が位置づけられているのだ、とはっきりと書いてあります。それが忘れられている、というよりもむしろ意図的にそこの面を無視して基本的人権のみを主張する、そうしますと、義務の方は誰かがやってくれるであろうということでゼロであります。したがって権利分の義務という分数の分母は、無限大のゼロですからこの分数はゼロです。せめて私どもは、これを一にもっていきたいのです。

私、西ドイツのケルンという所に一年半滞在しておりました。それから西ドイツのいろいろな都会に、一年ほど生活をいたしました。西ドイツの国民、それから組合でもそうですが、常に主張することは、〃義務の平等化〃です。日本の場合は逆で、分母の方だけを強調して〃権利の平等化〃をいいます。これが要するに、基本的人権をもっている、われわれは何を主張してもいいのだ、というようなはき違えから生ずる問題で、権利義務関係の中の権利の平等化だけを強く主張することになっています。西ドイツに〃出る釘は（打たれるんじゃなくて）のばす〃ということわざがあります、本当に努力して一生懸命やっていくものはそれをどんどんのばしていくのだ、というのです。ところが今、日本の教育で問題になっていますのは、出る釘は打つ、そして怠け者のレベルに全部を平等化させる、こういう考えがあるところに、私は日本の教育が貧困になって行く過程が、出てきているのではないかというようなことを心配しております。

外国から見た日本人

私の人生は満五十六になりますが、この半分以上が実は海外で生活しておりました。したがって、日本を考える場合に外から考えております。外から考える、ということがいかに必要かということを私は感じさせられるわけです。日本の問題、日本人についていろいろと日本では、日本という国はよくない、エコノミック・アニマルだ、もっとひどい言葉が使われております。これは何かといいますとパラサイト（寄生虫）という意味で、こんな言葉を心なき外国人が使っております。しかし、多くの外国人は、日本という国は何とすばらしい……こういう評価は、ヨーロッパ

でも中東でもそれからアメリカでも、日本に対する評価は大変に高いのです。ですからその意味において皆さま方は、どうか自信をもっていただきたい、そしてそこでごう慢にならずに根っこをきちんとすえて、教育というものは行われていくべきだと思います。自信なくして教育をするということは、教育の本道にもとると思います。自信とはごう慢をいうのではなく〝良識ある強気〟、自信とは、必ずいろいろな困難に耐えていくだけの根強さ、忍耐強さ、痛みを耐える強さであって、そういうことも教育、自信の中から出てくるのだと思います。

世界の中の日本を考える

そこで私は今日、世界の経済ないしは世界の政治、その中で日本がどういう位置におかれているか、世界の、たとえばアメリカの子どもたちの教育はどうなっているか、そして日本の教育をどういうふうに考えていったらいいか、というような問題について話したいと思います。そしてそれに対する質問もおうけして、私も勉強いたしたいと思っております。

新聞、日本の新聞はあまり正しい報道をしておりません。ただし、五つだけは間違いなく正しいということを申し上げます。たとえば、朝日新聞、読売新聞とかいう新聞社の社名、（笑い）それから七月二十四日という日付け、これも間違いありません。それから、誤植がないかぎり、昨日の株式の終値、株式の相場、これも間違いないと思います、四つ目は、金剛が十三勝二敗で初優勝したとか野球の結果、それからラジオとテレビの番組、この五つでございます。しかしあとのことは、最も皆さんにお知らせしなければならないことを、新聞が書いていないような気がします。

中国

中国に関する報道は、日本の新聞は九割九分間違っております、毛沢東がまだ生きているとか周恩来がまだ病院に入ってるとか、これは正しいと思いますが、そのほかの、われわれの知りたいと思っている問題についてはほとんど間違っている。たとえば、毛沢東がなくなったあと—私はこれを脱毛とよんでいますが（笑い）—誰が中国の支配者になるのか、毛沢東の奥さんの江青（チャンチン）がなるのか、周恩来か、こんなことはまるっきりわかりません。なぜかというと、北京のいうことをきかない地方の軍人、毛沢東のいうことをきかない知識人、地方の幹部、こんな人がいっぱいいるわけです。したがって、脱毛段階になったら中国は不毛になります。そして果して毛沢東の奥さんの江青があとをついで中国を治めるのか、周恩来が治めるのか、全くわかりません。毛沢東

の命令一下すべてのことがさっと行われる、というようなことは、中国ではないのです。日本の方は、たとえば藤山愛一郎さん、または保利さんが北京に行って、中国は大変すばらしい所だといっております。私も、中国と仲よくすることは反対ではないのです。けれども、〃本当の中国〃を知るためには、いろいろな新聞、北京放送も聞かなければなりません。そして、人民日報を読みますと、かつての松村謙三さんとか、ああいう方は見識をもっておられます。ですから北京の新聞には、〃松村先生〃と書かれています。いずれにしても〃松村先生〃という尊敬の字を使っています。しかし最近の人民日報で、藤山さんとか保利さんについては〃日本の藤山〃と書いてあって〃先生〃という字が抜けています。中共ベッタリの人を中国は、決して尊敬していません。中国という国は、これから先どうなるかは、全くわからない国です。

たとえば、日中平和友好条約というものがございます。私は日中平和条約ならいいと思いますが、〃友好〃という字がつくと反対なのです。中国語というのは日本語と非常に似てますので、友だちとして仲よくしていくのだ、という意味にとりがちなのです。しかしたとえばこういう例があります。〃必勝早稲田〃と早稲田の応援団が早慶戦でかかげるのぼりに書きます。そこへ中国人を案内して行きますと、中国人は全部感心します。〃何と日本の学生応援団は奥ゆかしいんだろう、相手のことをほめたたえている〃といいます。これは日本語では〃必ず勝つのだ、早稲田は〃と読むわけです。しかし中国語は別の読み方をします。〃必ず早稲田に勝つ〃と読みます。ですからこれは、慶応があげるべき旗なのです。日本語と中国語は非常によく似てるのですが、実は内容は非常に違うんです。一例が〃友好〃という言葉は実は〃同志〃という意味があります。ですから〃日本と中国は平和で、しかも同志なのだ〃ということになります。経済体制、社会体制の違った国が友好条約を結んでいる唯一の例外は、ソ連とインドとの間の平和友好条約で、それ以外はありません。それを今、日本は結ぼうとしているのです。友好は同志を意味しますから、ある場合は軍事協力もあり得る。ここまで実は藤山さんも保利さんも、考えておられないということになります。

ですから、こういう日中平和友好条約とか、覇権の問題、こういうものを軽々しくやってはいけないということです。覇権の問題、これはどういうことか、なぜ私が反対するかと申しますと、中ソ同盟というのがまだ生きております。そして、この時の仮想敵国は日本です。日中の平和友好条約ができますと、仮想敵国は米ソなのです。ところがアメリカはここではあまり問題にならずに、ソ連がおもな仮想敵国なのです。そして印度支那半島におい

ては中国とソ連が覇権争いをやっております。これだけで、小学校二年生の論理で、〝おかしい〟ということがわかるわけです。したがって覇権問題について、覇権は反対だと中国はいう資格があるかという問題です。

インド支那半島

インド支那問題について、皆さまはどういうふうに考えていらっしゃるかわかりませんが、実は、ハノイという北ベトナムの中心地が南ベトナム、サイゴンを陥落させたわけです。ここでご注意いただきたいことは、一九七三年一月に、ベトコンとアメリカとの間でパリ協定が結ばれました。それに対して今度北ベトナムとベトコンが、ソ連と中国の援助を受けて条約違反をして、南ベトナムを侵略したという事実と、南ベトナムがだらしがないとか、アメリカ軍が引き揚げてしまったとか、いうこととは、別個に切り離して考えるべき問題だと思います。しかしいずれにしましても、ベトコンを解放軍、ないしは革命解放軍と呼び、南ベトナムが解放されたといっているのは、日本の新聞だけです。日本以外の国の新聞はベトコンと呼び、解放ではなく陥落したといっております。それはともかく、この陥落に際してどういうことが行われたかというと、サイゴン陥落の祝賀の集会がありました。その時に中心になったのは北ベトナムの要人で、そのまわりにベトコンがいるわけです。ということは、サイゴンがハノイペースで支配されたということです。ベトコンはわき役で、主役は北ベトナム。では北ベトナムはどうなっているか、というと、内紛があります。これは、まずファンバンドン派という親ソ派があり、チュウ・ウォン・チン（長征）という親中国派があって、この間で内紛があります。チュウ・ウォン・チンという人は北ベトナム議会の議長でつい先ごろまでハノイに軟禁されていました。そして中国とソ連との北ベトナムにおける勢力は、大体七対三（ソ連七、中国三）であります。それで、北京の人民開放軍で最も重要な役割をしており、副総理である張春橋という人がおります。この人がハノイに出かけて行って、何とか中国ともっと緊密な関係をとろうと説得しましたが失敗に終りました。すると、ハノイというところは、ソ連の力が非常に強いということになります。そしてハノイペースでサイゴンが支配されるということは、親ソ的な力が強いということになります。その証拠に、この南ベトナムが非同盟中立ということを宣言した時に北京は、極めて冷淡な態度をとりました。これはなぜかと申しますと、同盟中立ということは現状固定ということです。現状固定ということは七対三の比率のままで、ベトナムはソ連の勢力で治めるのだ、というふうに宣言

したに等しいという考え方をもっています。

では、北ベトナムとベトコンが、ソ連と中国の援助をうけて南ベトナムを侵略したのだという時に、一体その証拠があるかというと、実はソ連側がはっきり自分でいってるわけです。これは大変、日本の防衛の問題についても重要なことになっているのです。それはどういうことかといいますと、ベトナムに、カムラン湾という、東南アジアで最もいい港があります。昔、日露戦争の時にバルチック艦隊がインド洋からインド支那半島を通過して行く時に、この港に寄せてくれと当時の支配者フランスに申出たことがあります。それほどいい港です。もちろんアメリカがベトナム戦争に介入していた時に、アメリカの軍事基地であったことも間違いありません。ここを貸してくれ、使わせてほしいとソ連側がいってきました。これをもし貸すことになると、ソ連のインド洋、東南アジア、日本を含む極東に大変な海軍力ができあがります。東にはウラジオストックがあり、西にはアンダマン諸島があります。これはインド領ですが、なぜここをソ連が使っているかといいますと、この前の印パ紛争の時に、パキスタンをアメリカが援助しました。それで、インドはソ連と結んだ、ソ連とインドの友好条約がこれです。その結果アンダマン諸島をソ連が使っているわけですが、このウラジオストックとアンダマン諸島のちょうど中間にカムラン湾があることになります。ソ連のインド洋やアジアにおける海軍力は非常に強くなります。これは、日本にとってもアジアの安定化にとっても、危険な要因が生まれてくるということになります。

なぜソ連がこういうことを申し出たかといいますと、今度の戦争でソ連は北ベトナムおよびベトコン対戦車ミサイル、対空ミサイル、武器弾薬等の援助をしたではないか、その見返りとして申出ているといえます。このいい分から見ても、南ベトナム侵略について、北ベトナムとベトコンの背後からソ連が援助したということを、ソ連自身がいっていることになります。

次に、カンボジアはどうかという問題になります。カンボジアというところは、以前シアヌークが治めておりました。ところがロンノル政権に追い払われて、シアヌークは北京に行きました。そして今度はロンノルが倒れシアヌークが凱旋将軍のような形で帰って行くのが当然だと私は思います。しかし彼は依然として本拠を北京において、現在は北朝鮮におります。なぜ帰らないのか、帰らないのではなく、帰れないのです。実は、カンボジアという国は今度の戦争で、反ソ、反中共の態度をとりました。そしてクメール・ルージェという勢力が大きな勢力をもっています。しかし最近この勢力がハノイに接近してきたわけです。親ソ的に

なってきたということです。それともう一つの問題は、旧ロンノル勢力というのは依然としてあるのです。したがってカンボジアでは、北京派であるシアヌークをどう処遇するか、今後の大きな課題だといえます。

ではラオスはどうか……、ラオスは今、大変食糧に困っています。そして中国は、右派と左派とのバランスの上にたって中立化をはかろうとしました。ところがソ連がいち早く右派を追放したわけです。そして、ソ連的左派という形に切り替えてきました。これで、インド支那三国（ベトナム・カンボジア・ラオス）というものを、陰で操ることができるわけです。そしてこの三国をほとんどソ連の勢力によって社会主義化の方向へ徐々に進められて行くだろうと私は思います。そうなると、インド支那半島の今後はどうなるのか、ということで日本が重要な役割をもつことになるのです。

これは何なのか、一つの問題は、インド支那はソ連の力が非常に強い、そして中共の力もある、今度のマヤゲス号事件でおわかりのように、手を引いたとはいえアメリカの勢力も依然として強い。こういう三極構造下にあって、お互いがチェックしあっているのだから大きな戦争にはならないだろうということがあります。しかしベトナムもラオスもカンボジアも、経済的にはピンチなのです。となると、アジアに日本という国があって、これが経済力だけをもっている、軍事力はない。すると、日本がこのインド支那半島に経済協力をするということが、インド支那半島の安定化につながるのです。そしてこれは、アジアの安定化につながる、そればかりでなく、アメリカの肩代りとして日本が経済協力や援助をするとなると、日米関係もよくなって行きます。日本の役割というのは非常に重要であるといえます。

こういうことを考えないで、インド支那半島はますます混乱を深めていく、しからばわれわれは北ベトナムを、ラオスを、カンボジアを承認する、承認しただけでは食えません。やはり、日本の経済力の手をさしのべる、これだけの気持ちがなければ、日本はだめです。アジアの本当の安定を望み、愛される国になるには、どんどん日本の経済力でインド支那半島を援助して行くことが、これから要求されてくると思います。

アシアン

それからもう一つ、アジアには、フィリピン、タイ、マレーシア、インドネシア、シンガポールの五か国―アシアンがあります。これらの国々が今何を考えているか。インド支那半島がああいう形でアメリカ軍が退いたがゆえに陥落した、われわれはどう

したらいいのか、と大変に迷っているわけです。これらの国々がねらっているところは、一九七一年十一月のクアラルンプール宣言で、〝平和と自由と中立〟という考え方を出しました、中で特に重要なのは〝中立〟ということです。自分たちの国々を守っていくにはこれらの国は中立化地域にならなければいけないのです。

たとえばフィリピンでは、一九七二年から戒厳令がしかれています。しかし昨年は経済状態が大変よかった、したがって政治も安定化しています。フィリピンばかりでなくこれらの国々が安定化するためには、やはり日本の経済協力が必要なのです。日本という国は、自分の国のことだけを考えてはいられないだけの責任のある地位に、実はあるということ、またそれだけの能力を高く評価されているということ（個人々々の政治家の評価とは別に）なのです。

朝鮮

それからもう一つの外側から見た問題、朝鮮半島の問題を申し上げます。その前にちょっと紅衛兵のことを申します。真面目な紅衛兵ほど、中国の現実に絶望して、みんな大陸から逃げて来ているということです。台湾、ホンコン、ベトナム等、アジアの各国で私は逃げてきた紅衛兵に話を聞きました。彼らの話によると、中国の内部事情というのは大変な状態だといいます。日本の新聞に書いてあるような、ハエがいないとか、ゴキブリがいないとかいうこととは別問題なのです。豊かな土地もありますが、非常に貧しい土地もあるのです。正式には、年間所得一三〇ドルといわれていますが、実際は七五ドル、端境期になると一村全部が食えなくなる。するとそういう人は、公に認められてよその村へ行って掠奪をする、という現実はすべて中国の農業政策の失敗から来ているのです。こういう実情を知りながらどうにもできない若い紅衛兵たちが逃げる、紅衛兵は今や紅兵衛、日本読みにして〝アカンベー〟です。（笑い）

先月私は十日ほど韓国に行って参りました。そして板門店にも出かけ、トンネルも見て来ました。ここで、ベトナム戦争のあとは朝鮮戦争なのかという問題についてちょっと考えていただきたいと思います。

北朝鮮の金日成が、ちょうど南ベトナムが陥落した時に北京に出かけました。ところが人民日報によると、最初の歓迎ぶりとひきかえ、共同コミュニケが出た時にきわめて冷やかなものでした。〝朝鮮半島の統一については、朝鮮の民族が自ら決すべき問題だ〟ということは、〝中国は援助しないよ〟ということです。

この理由が次のように人民日報にのっています。一つは、韓国にはベトコンのような勢力がないということ、二番目に、韓国はご存知のようにほとんどはだか山です、したがって敵もよく見えるし敵からもよく見えます。ゲリラ戦ができないということです。またベトナムの場合は、ベトナム、ラオス、タイと横の連絡がとれます。しかし朝鮮半島は東は日本海、西は東支那海ですから横の連絡がとれません。これが三番目の理由で、四番目には、日米安保条約があります。この中に、日本の安全は韓国の安全、韓国の安全を保障することが日本の安全なのだとあります。この〝韓国条項〟というのが生きている、こういういろいろな理由で、中共は金日成に韓国に攻めて行くことについて、協力はしないといったわけです。ですから韓国が、いまにもベトナムの次に朝鮮半島に動乱がおこるというように日本の新聞や週刊誌は書いていますが、そういう事実はありません。

ただ韓国では現在、三日戦争ということが盛んにいわれています。休戦ラインのところに板門店というところがあります。ここはソウルから自動車で約一時間のところです。北側からここにトンネルを掘ってきて、見つかっただけでも十何本があります。これからもふえると思いますが、見付からなければ、これを使ってどんどんゲリラ戦で軍隊を送り込むわけです。ジープが十分走ることのできるトンネルです。そのほかいろいろのことから、三日間でおさまる三日戦争ということが韓国の常識です。この韓国の安全は、日本の問題です。そして韓国で今困っているのはお金の問題です。だから日本が経済協力をすると、韓国が自分の力をもつようになってきた北に対抗する、そして日本の左翼思想からこれを押える、という力が必要になってきます。なぜ私がこういうことをいうかといいますと、自由を守らなければならないからです。

アメリカ

こういう工合に考えてきますと、アジア諸国というのは、日本の経済協力や経済援助を期待しているわけです。そして経済が協力し合って行けば、アジアは安定化し、日本にとってもプラスになります。宮沢外相あたりも、そういう見地にたって考えておられるのだと思います。

それならばアメリカは、なぜベトナムから引きあげたのか。アメリカにはいろいろと家庭の事情（笑い）があるわけです。昨年の十一月の中間選挙の時に、今の与党である共和党ではなく、野党の民主党が圧倒的勝利をしめました。有名な調査機関ギャラップによりますと、〝下院では恐らく二十名から四十名の新人が出

るだろう〃というように予想しましたが、実際は七十五名の新人が当選なのです。そればかりでなく、アメリカ議会史上初の、過激派の新人が五名出たのです。そうしますと下院の議席は二九二名、その内の三分の二を野党がしめた、上院も二、三名増加の予想が五名増加しました。知事。アメリカには大きな州の知事が十名あります（ニューヨーク州、ペンシルバニア州、オハイオ州等）が、この知事がオハイオ州を除いて九つの州が民主党の知事になりました。こういうことで昨年十一月の中間選挙では、民主党が圧倒的勢力をもちました。

こうなるとどうなるか、といいますと、今までは行政府、ホワイト・ハウスが、これまで（ケネディ、ジョンソン、第一期ニクソン、第二期ニクソン、フォード）は外交というものを独自に行ってきました。その代表的な例がキッシンジャーです。ところが今度は、野党の立法府（議会）が非常に力を得ました。するとこの議会の動きを、行政府は無視することができなくなったのです。ですから民主党の理念がアメリカの外交に反映してくることになってきたわけです。

では、民主党の考え方はどういうことなのかを簡単に説明いたします。これは、新しい孤立主義という考え方です。一は〃脱アジア〃です。アメリカとフランスというのはしょっちゅう喧嘩していますが、これは家庭内の喧嘩のようなもので、殺すか殺されるかというような問題ではありません。ところが、アメリカとアジアの場合は、喧嘩したら、〃革マルと反帝〃というようなものと同じで、鉄パイプのなぐり合いでどちらが先に死ぬか殺されるか、生き残るかという問題なのです。そういう関係だということを考えていただきたいのです。だから民主党は〃アジアから手を引け、ベトナム戦争などというのには手を出すな〃そして十億ドルに及ぶところの軍事援助とか経済援助を、全部上院下院でけとばしました。これが脱アジア、新しい孤立主義という考え方なのです。

それから二番目は、国内問題と国際問題があった場合は必ず国内の方を優先する、ということです。ギャラップより以上に信びょう性のあるヤニケロビッチの調査では、一位がインフレをおさめてくれということ、これが七八％、次がウォーターゲートのような事件をおこさないでくれというのが三四％、では、日本のことはというと、ずっと下位の方で、日本と極東の問題というのが一・七％出てきます。石油及び中東の問題はもっと下で〇・八％、合わせても二・五％しかないという状態です。こういうところに、アメリカがベトナムで撤退しなければならなかった事情があるわけです。

ところがここにもう一つ、新しい国際主義というのができました。これは一つは、アメリカとソ連は核戦争をやってはいけないということ、そして緊張緩和政策を続けていくことが必要である、しかしながらソ連と仲よくするためには、ソ連に絶対勝つだけの軍事力を増強する。二つ目は、世界の中でもはやアメリカは孤立していることはできない、皆と仲よくしなければいけないが、誰とでも仲よくしていくことはやめて、同盟国を整理する、という考え方です。そしてこの同盟国の一位が南北アメリカ、たとえばカナダ、メキシコ、非常に仲の悪かったキューバ、南米の一部の国々、二位が西ヨーロッパ、第三番目に日本という順でアメリカは同盟国を整理しました。すると、新しい孤立主義と、新しい国際主義の間に、どういうように日本が位置づけられているのかというと、次のような形になります。

新しい孤立主義、これは議会であり、新しい国際主義はホワイト・ハウスということになります。この二つの共通した部分は何かといいますと、南北アメリカと仲よくしよう、それから西ヨーロッパと仲よくしようということです。しかし日本のこととなると、国際主義の方は認めても孤立主義の方は脱アジアですから認めません。日本は、ではどういう態度をとったらいいかということは非常に重要なのです。最近のアメリカは国際的影響力が少なくなって、せちがらくなってきました。日本にこれだけのことをしてやった、それなら日本はアメリカにどれだけのことをしてくれるのか、という計算をするようになりました。安保の傘、アメリカの核の傘の下にただ乗りをしているばかりでなく、核を積んだ船が港に入ることもいけないという、何か事がおこった場合には事前協議をやれという、いろいろうるさいことをいっている、それならアメリカは日本から手を引きますよ、といったら日本はどうしますか。軍隊がない、材料も石油も、何もありません、あるのは人間だけで、どうして自分の国が守れるでしょう。自分の国を自分の手で守れないところの国は国家と呼びません。地理的陸地というのです。これは世界の常識です。そういうことで、われわれはアメリカに何かをしてくれという時代から、われわれがアメリカに何をしてやることができるかということを考える時代に入ったのだと考えなければならないと思います。そういう意味で私は、アメリカとのつきあい方というのも、文化交流とか教育等を通じてもっと交わって行くべき一つの大事な国なのだと考えています。

（つづく）

（東京工業大学）

（一九七五・七・二四　日本幼稚園協会夏期講習会講演より）

ひとつの出会いに思うこと

浅野恭子

出会いにはいろいろな「出会い方」がある。出会いに始まる人と人との一連の活動において、動いている事実を目の前にした時、人のいろいろな感じ方を思い、自分においても自分が生きて変化していることが実感として感じられる。

＊　＊　＊

ガラス戸のこちら側で、光代ちゃんのお母さんと知人と私とが光代ちゃんの学校での様子を話題にして話をしている。木戸がバタンと動く音、人がバタバタと駆ける音、「ハハハハ」と笑う声などが同時に聞こえてきて、突然耳でとらえられる世界が転換したような気がした。と、突然ガラガラと大きな音。ハッと身を半分浮き立たせる。「あー、きっとお友だちとおもちゃ箱を全部ひっくり返しているんですよ」とお母さん。今度は「バンバン」「バンバン」という声の合間にカチッカチッという音。しばらく続いていくうちに、だんだん聞こえてくる音が大きくなる。ガラス戸にドンと何かが当たる音がして、ハッと後を見ると、ガラス戸越しにこちらを見て「ハハハハ」と声を出して笑っている女の子と男の子の顔があった。手に持っていた玩具の鉄砲をこちらに向けて「バン」と撃ってくる。「バン」という声でこちらも防ぐ姿勢をしたり、こちらからも二人にむけて手で鉄砲の形を作ってお返しをしたりやりとりが続く。そこにいた五人が鉄砲でのやりとりの場に参加していた。楽しくよく動いたあいさつ場面であった。

光代ちゃんのお姉さんが帰って来て、光代ちゃん、お姉さん、私の三人で近くの公園に行くことになった。お姉さんがピョンピョン跳ねるようにして、時々後をふり向きながら先頭を歩いている。光代ちゃんが立ち止まった。前方左斜め上の電線

に留まっているはとを見つけて指さし、私の顔を見て声は伴わないが口を開けて「はと」のようにお話する。「はと？」と言うとうなずいてもう一度はとのいるほうを指さし私の顔を見てうなずき、両手を体の横につけてパタパタと鳥が飛ぶ時のしぐさをして、一本の指で左側から右に向って大きく弧を描き、私をのぞき込むようにして「はと」の口の形をする。「うん、はとね。こうやってとぶね」と言って手を上下させながら少し跳ねる。光代ちゃんも両手を上下にパタパタさせながら跳ねる。そして二人で走り出して先に歩いていたお姉ちゃんに追いついた。

公園でシーソーに乗って、子どものニコニコしている顔を見ながらバッタンバッタンと繰り返している時、ふと自分において「ちょんまげ手まり歌」が聞こえ、すさまじい速さでその物語が思い出されてきた。（注）

ちょんちょ　ちょんまげ
まげ　ちょんちょ
ころり　ころころ
首　ちょんちょ……

（「ちょんまげ手まり歌」　上野瞭作、井上洋介絵、理論社刊）

＊　＊　＊

やさしい殿さまを柱とする藩でのこと。藩のあり方やり方を常に〝ありがたい〟ものとして考え受け入れるように言いきかされて育った女主人公おみよが六つの年になった。六つになったことで両親を含む周りの大人が、いわゆるやさしい藩のしきたりで、おみよが「やさしいむすめ」になるのか、「お花畑に入る」ことになるのか、関心を向けるようになる。同時におみよ自身は今までの家での生活よりも、同年齢の友だちである清一郎といっしょに活動することのほうへより関心が向けられた場面が展開する。子どもが、社会の現在・未来を担う存在であることを周りの大人がはっきり認識できるような動きをし始める時がある。おみよの場合は子どものほうから動き出したというよりむしろ、藩のしきたりという側からの動きに押されて子どもの動きがかなり規定されていった感がする。

おみよに「やさしいむすめ」になることが言いわたされ、その儀式（山んばのほこらの前で子どもの両ひざから下を切断する）が行なわれる。おみよにはそれに関連したまわりの動きやしきたりのことはよく分からない。母は「ありがたいお話じゃ

こと。これはご先祖さまにご報告してさっそくおれいを申さねば……」と喜ぶ。藩の人は「……こわくない、こわくない。すぐにやさしいむすめになってもどってこれるぞ。……」と声をかける。全く〝まな板の上の鯉〟といった状態で「やさしいむすめ」になる儀式に臨んだおみよは、その後ずっと足の痛みを訴え続ける。この儀式はおみよにとって、周りの動きに気がつき始める大きなきっかけになる。夢で、ため池のそばのお花畑に沈んでいる瘠一郎の「出してくれよう」と叫ぶ声を聞き、へそくい虫がついた父を藩の人に殺されたおみよは、瘠一郎を探して歩く。

「瘠一郎。やさしいむすめていやなもんじゃど。おまえといっしょに山んばごっこをしたように走れんど。走れんだけならええが、すわったきりじゃど……」

「……わしはおまえが、出してくれ出してくれ—言うのをなんべんも聞いた。そのたんびに玄蕃さまがわしをとめたんじゃ。……わしはのう、瘠一郎。いっぺん足をのばしてらくらくとねむりたいのじゃ。」

そこでユメミの花を食べたおみよは山んばに出会う。

「おまえはだれじゃ」

「……お山からお山へ歩きまわっておる山んばじゃ。知っちょるかのう」

山んばとお山のいただきまでいっしょに歩きながら山んばの話を聞き、今まで育ってきた社会の事柄のいきさつを知る。「お花畑に入る」ことが子どもの場合口へらしの為であったこと、大人の場合口へらしと藩の統治者にとって都合の悪い考えをしている者をなくしていく為であったこと。絶対視されていた殿さまが、実は老婆の姿をした人の血を吸うものであったこと。「やさしいむすめ」になる儀式が、そこに住む人々に他の世界を知らせまい、分からせまい、見させまいとする為のものであったことなど。

「おじいどの。わしはわかった。わかったど。やさしい藩はおそろしい国だったのじゃな。わしはわかったど」

おみよがそうさけんだとき、じぶんのからだがもう子どもではないのに気がついた。すらりとした、ひとりの年ごろのむすめになっていることがわかった。山んば老人は、そんなおみよを見ると、しわだらけの目をほそめ

て、ふっふっふっと笑った。「知るということは、大きうなることじゃ。すくすく大きうなることじゃ。しかしのう、おみよ」

「やさしい藩」と言われていた社会を知り、やさしい藩の山のむこうにはさまざまな国があることを見たおみよは、自分の行きたいと思う他の国に行くか、あるいは「やさしい藩」にもどるかどうするかの決断を迫られる。おみよが決断する瞬間は、深遠な、広がりのある、厳粛な時として感じられた。

「おじいどの。どうすればええのじゃ」おみよが心の中でさけんだとき、おみよはじぶんがもうわかいむすめでないことに気づいた。……

「わしはいっぺんに、おかあどのぐらいになったど」……「そのおかあどのは、なにも知らずに死んでしもうた。おじいどのは、それもしあわせじゃと言うたが、はたしてそうじゃろうか。……わしは、ほおっておくわけにはいかん。なにもかも知ってしもうたいじょう、ほおっておくわけにはいかん。そうじゃ。わしはひとりでもいい。わしのみたこと、知ったことをつたえねばならんのじゃ。わしは国にもどるど」

おみよがそう決心したとき、おみよは、じぶんがひとりのおばばになっていることに気づいた。

おみよは山んばとして「やさしい藩」にもどることを決意し、刀で体をずたずたにされながら自分が事実と認めたことを言い続け、新しい広い世界があることを言い続けた。

それぞれの国をめぐる山々（それは人と人とがつくり出す社会活動のひとつの規範、あるいは枠の象徴としてとらえることができる）を歩きまわり、時に藩におりて行っては殺されるようなひどい目に会いながらも、山んばとして、よしと思い、決断したことを言い通し、在り続けているそんな山んばの姿に深い感動を覚える。

＊　＊　＊

「やさしい藩」のことについて、どのような立場や見方で考えるかによっていろいろな感じ方が成立するであろう。

「やさしい藩」のしきたりに忠実に生きている人々にとって、自分たちの藩の殿さまは「やさしい殿さま」であり、藩の一切をとりしきっている玄蕃は「やさしいおかた」であり、住む国

はやはり「やさしい藩」なのである。そこで忠実に生きている人々においては、「やさしい……」ということばが成立する世界が展開していくのであり、その世界に住んでいることで、幸せな感じを感じることができているのである。

山んばの動きに即して考えてみると、「やさしい藩」は、そこに住む人にとっても自分にとっても「やさしい……」という表現はとうていできない世界であり、矛盾することが多く感じられる所である。

おみよが両親のもとで暮らしていた頃、瘠一郎と遊ぶことがいちばんの楽しみで、そのことが幸せな感じであった。自分の生きていく道を決断した瞬間から、おみよの幸せな感じは「やさしい藩」で感じられるものではなく、その他の国でもなく、自分が決めた道を歩くことの中に幸せを感じていったように思われる。幸せな感じ、それは自分がここだと気づいたところで、自分がこれだと本当に思ったことを実践し、実現していこうという動きの中に感じられるものなのかもしれない。そしてそれは、自分が創り出すことができるものなのだ。

＊　＊　＊

光代ちゃんのお母さんの話では、現在通っているろう学校幼稚部のクラスで、元気にお友だちとも楽しく過ごせていて、喜んで通学しているという。担任の先生との相談のうえで、週に一度、家の近くの幼稚園にも通っている。そこではよく部屋のすみで立ってお友だちのすることをじっと見ていることが多い。お友だちや先生から、光代ちゃんもいっしょに、という働きかけがあっても、じっとしている。幼稚園には喜んで行きたがるという。学校での動きと幼稚園での様子がずいぶん違うので、どうしたのかとお母さんとして心配していらっしゃる。

光代ちゃんが幸せな感じを感じられる世界は、これからさらに広がっていくことであろう。そして幾たびか決断し、自己決定していく場面に出くわすことであろう。それらのいつか、どこかで山んば的な動きをする人に出会うことであろう。おみよとはまた違う選択の仕方をしたり、違う進み方をしていくのかもしれない。

家族ではない、学校の友だちでもない私や知人との出会いが、光代ちゃんにおいても楽しく意味のある体験として生き続けてくれることを願っている。

（お茶の水女子大学）

注　お茶の水女子大学児童学科児童文化研究室（本田和子先生）「作品を読む会」でとりあげたものである。

教科研究における保育の授業の展開（一）

磯部景子

はじめに

これから、教科研究において保育の講義をどのように展開してきたか、また、講義をすすめていく間に考えさせられたことについて述べてまいります。

私が所属している大学は、教育学部だけの単科大学です。教育学部では、教科研究は卒業するために必要な科目となっています。

教科研究は国語科研究、社会科研究、算数科研究、理科研究、音楽科研究、図画工作科研究、体育科研究、家庭科研究の八教科にわたっています。大学を卒業するために、さきに述べた八教科から五教科を選択し、履習することになっていますので、学生はどの五つの教科を選ぶかというところでは、選択の余地がありますが、教科研究を履習しなければ卒業できないということは、教育学部の特徴のひとつとしてあげられます。

大学には次の教室があります。国語、東洋学、法経社、教育学、心理学、職業指導、特殊教育、幼児教育、数学、物理学、化学、生物学、地学、音楽、体育、家政学、技術、の教室です。

私は家政学教室に所属していて、教科研究では家庭科研究を担当しております。

教科研究は一教科について、一年間にわたって履習するのですが、家政学教室では、一年間をふたりで分担していますので、これから述べる授業の展開は半年にわたるものです。私の場合、家庭科研究を四クラス受け持っていますが、学生はそれぞれ教室別にどの時間の教科研究を受講するかを指定されていますので、時間ごとに、それぞれ専攻のちがう人といっしょに子どもについて考えることになります。

学年は主として三年生ですが、一部四年生もいます。一クラスは大体六〇名～八〇名です。どのクラスも女子学生の人数が多く、男子学生はクラスの人数の二五％～三〇％くらいです。大学全体では女子学生の人数が半数を少しこえていますが、家庭科研究では、女子学生の方がかなり多く選択しています。

教科研究を半年間すすめていくことは、はじめて経験した時

も、五年たった今でも、何かととまどうことばかりです。

大学で、子どもたちのいないところで、大学生といっしょに子どもについて、考えたり学んだりするには、〃何からはじめればいいのか〃〃何をすればいいのか〃と、いつも考えさせられています。

はじめの三年間は、まず、子どもたちの記録をとることからはじめていました。記録については別の機会に述べますが、それぞれの子どもの記録には、記録を書いたあとに、記録をとって〃子どもについて感じたこと〃を書いてもらいました。

集まった子どもの記録を読むと、ひとつずつとてもおもしろいのですが、記録を読みおわり、〃子どもについて感じたこと〃のところまでくると、大きな壁にぶつかってしまいました。子どもについて感じることのところに、〃子どもは少しもじっとしていなくて、おちつきがない〃〃わがままである〃〃自己中心的である〃と書いてあるのです。それもあまりにも大勢の人が書いているのです。書いてある記録がおもしろいだけに、おちつきがない、わがまま、自己中心的、ということばにぶつかるたびに、〃子どもの記録に興味がもてるにはどうしたらよいのか〃〃記録が読めるということはどういうことなのか〃と考えさせられました。

だれでも、子どもの記録を何回かとり、読んでいるうちに、いつのまにか興味をもって記録を読めるようになるということはいえるのですが、そして、それは今後、それぞれの人が子どもたちといっしょに生活する中で、大いに楽しんでもらいたいところですが、できることなら第一回の記録をとるときから、子どもに興味を持ってほしいと願うのです。

そこで、子どもの記録をとることは、子どもについて何らかの関心がもてるようになって、それからはじめることにしました。

では次に、最近試みるようになった授業の展開をできるだけありのままに述べることにします。

子どもの世界

子どもはどのような世界にすんでいるのでしょうか。子どもは何をどのように感じ、何をどのように考えているのでしょうか。

最近では、「子どもの世界」ということから授業をはじめることにしました。

私たちは知らない間に、自分では気がつかないままに、子どもに対して責任を感じて、何かをしようと思っているものですが、できるだけ自分を自由な状態にして、〃子どもはどんな世界にすんでいるのかな〃とか〃子どもは何をどのように感じているのか

な〃と思いめぐらしてみることは大切なことでしょう。

そこで、まず、しばらくの間、〃おとなとして、あるいは先生として、子どもたちに何をしなければならないか〃とか、〃おとなとしての責任は何か〃といったことがらを頭からとり去ることにします。

授業時間に小さな紙を配って、その紙に、「〃子どもはどんな世界にすんでいますか？〃ということばをきいて、思いうかぶことを書いて下さい」といい、一〇分くらいの時間でおもいうかんだことを書いてもらいます。そして、次の週に、それを読みあげます。

学生はひとり、ひとり、それぞれ子どもに関しての経験がちがい、また、思いうかぶこともそれぞれちがっています。

〃小さな弟や妹がいて、あるいは姪や甥がいて、いっしょにくらしている人〃〃近所に知っている子どもがいて、その子どもが遊びに来るとかあるいは、親戚に子どもがいて、時々子どもに接する機会のある人〃〃子どもに興味を持っている人〃〃子どもに接する機会のない人〃〃子どもにほとんど関心のない人〃などさまざまです。

子どものすんでいる世界ということばをきいて思いうかぶことがらも、〃目の前で子どもをみているように、子どものうごきをありのままに書いたもの〃〃子どもへのあこがれを書いたもの〃〃子ども時代をなつかしむもの〃〃自分自身の子ども時代をふりかえって書いたもの〃〃子どもの世界ということばから思いうかんだことばを書いたもの〃〃子どもは、まわりの世界をどのように感じているかについて書いたもの〃〃子どもの世界はきっとこのようなものだろうと思いめぐらして書いたもの〃〃子どものいる情景を物語り風に書いたもの〃あるいは〃子どもの世界をまるでわからないものとして、又はまるで忘れてしまったもの〃として書いたものなどいろいろです。

では、〃子どもはどんな世界にすんでいますか〃について、書いたものをいくつか紹介いたします。

○

子どもの世界の水平線は低いところにある。彼らは体が小さいので、せまいところへも入りこめるし、地面にしゃがんでいても、腰がいたくならない。小さなみみず一匹のあとを追っかけて、空想する。空箱や空罐が城になる。（美術　M・I）

○

子どもは、水がとってもすきで、洋服がよごれるとか、水にぬれてかぜをひくなんて考えないで、すきな時に、あきるまで水とたわむれていたがる。

いつも、お母さんのしつける外側にいて、石をけずってみたり、蟻の巣を見つけるのに土の上をはいまわったりする。

お昼寝は実は少しも好きではなく、おとなが寝ている間に、手をべたべたにしながら、しゃぼん玉をつくって、ひとりで楽しんでいる。

（教育　M・Y）

○

●おもしろいものに、素直に反応する。

●テレビ、まんが、絵本などを見て喜び、真似る。

●体を動かさずにはいられなくて、外へ出て遊ぶのが好きである。

●先生は特別なものとしてみている。

●めずらしい人がくると、すり寄って来たり、または、はずかしがって、逃げたりする。

●小さい子どもは、おんぶをしてもらうのが好きである。

●すぐ泣き、すぐもどる。

（幼児教育　M・M）

○

お父さんとお母さんと兄弟といっしょにくらす。友だちと遊び、服や手をよごして帰る。お父さんやお母さんに今日あったことを話す。今日のおやつは何かと心をわくわくさせる。お父さんの帰りを待つ。

（音楽　S・W）

○

「母親とか家庭に命綱を結びつけて広い宇宙を遊泳し、さまざまなできごとにいちいち驚いている」といった感じを子どもたちからうける。おとなには子どもの知っている世界は限られているように思われるが、未知のものが多く、体も小さい子どもたちにとって、その小さい世界も限りなく大きなものであろうと思う。

（心理学　S・A）

○

五歳になる姪やその友人の会話などを聞いていると、その世界は決して美化されるようなものではないと思う。しかし、彼女らの自己主張や協調性などをみると、素直な面も多い。子どもは理由と結論が、すぐ一対一の関係で結びついていて、私にとってそれは驚きでもあるし、好奇心もそそられる。子どもの世界は私たちの考える美しさばかりの世界ではない。写実的な色彩の強い世界だと思う。

（音楽　H・A）

○

子どもたちは見るもの、見るものに興味を示す。ほんのささいな変化さえも、目を見張る。子どもにとっては、ものめずらしいものばかりの中に自分がいるように感じるのではないだろうか。

（国語　T・F）

○

生まれて育った自分の家が、子どもにとってはひとつの国。

一歩外に出てみると、そこはまるで外国へでも来たように、見るもの、聞くものがめずらしい。

自然が大好きで、動いているもの、石っころのようにじっとして動かないものにも愛着をもっている。（不明）

○

子どもが手にするものは、おとなのものも多いので、子どもはまわりの世界を巨人の国のように思っている。（不明）

○

悲しいことはできる限り少なく、あらゆるものがハッピーエンドであって欲しいと思うのは、おとな以上に強いようである。花でも洋服でも、何でも色があざやかで、明るいものが好きである。ひとのものの方が、みんな良く見えてしまう。（国語　M・I）

○

どんなところへも自分の気持ちを動かすことができるゴム風船のような世界。そして自分のまわりのほんの小さな世界しか見ることができないにもかかわらず、その世界の中でおきたどんな小さなことも見逃がすことがない。（音楽　S・S）

○

夢の中。砂場の台所。木でつくった階段。何々ごっこ。親分子分。物まねの世界。母親の買物かごの後。父親のひざの上。となりのSちゃんの秘密の場所。がんがんの秘密基地。紙飛行機。自由な世界（月へ汽車で行ける世界）。死んだ人が寝ているようにみえる世界。（美術　Y・O）

○

ふわふわときもちのいい世界。おとなたちと見る高さが違う。同じ机でも下から見る。なんでもかんでも自分のものだと思う。明るく楽しい世界。悩みなんてない世界。母親、父親、先生、友だちと善意の中の世界。（不明）

○

おかあさん。おとうさん。自分の住んでいる家。おもちゃ箱。おかあさんの声・顔。自分の家のまわりの家や道。虫たち。（音楽　K・S）

○

夢と現実の間の世界。すべて純粋な世界。やわらかいしゃぼん玉の世界。とまどいだらけの世界。空と地の中間を駆ける世界。うそが多いのにそれがちっともうそでない。歩いてアメリカへ行けて、眠っている間に北極星まで到着することができる。大きいのが太陽で、小さいのがお星さま。（国語　A・H）

●どろんこの世界。

●石ころや空きびんやタイルなどが、宝物である世界。

●ミルクとチョコレートとキャンディの世界。

●母親のスカートのまわりの世界。

○

夢の中。童話の世界。幻想。母の中。理想の世界。シャボン玉の中。白い馬。おもちゃ箱。海。お話。ミルク。まだ行ったことのない道。花のいっぱいある世界。いくつも行方の分れた道の分岐点。愛。神聖。わたがし。神様。エンゼル。（美術　F・Y）

○

童話の世界。砂場の山の上。おかあさんのひざの上。おとうさんの腕の中。空に浮かんだ雲の上。机の下の影にうつった板の上。海の渦からとびちる〝あわ〟に似た世界。風にひらひら舞う花びらの行き交うような空間。（H・T）

○

汗とどろんこにまみれた世界。ほこりの中を歩いている。風船につかまると飛べると本気で思っている。動物も人間だと思いこんでいる。おとながおもっているよりずるがしこい社会。動くものには何でも触れる。虫、花、犬、猫、おもちゃ、雲、青空、棒のついたあめ。（美術　H・I）

○

●富に対する偏見のない世界。

●自分と同じ者ばかりの構成。

●「みえ」のある世界。

●おもしろい遊びを発見する子どもがリーダーとなる世界。

●おとなにはわからない世界。

●子どもだけの秘密の世界。（法経社　S・M）

○

空想の世界。遊びの世界。自分がみて感じたものの世界。自分に対していっしょうけんめいしゃべっている世界。聞いたことがそのままみたようにおもう世界。みたものがそのまま自分にあてはまると考える世界。夢でみた世界が、実際の世界かわからない世界。いっしょうけんめい動きまわっている世界。（技術　M・T）

（つづく）

（愛知教育大学）

「それぞれの子どもらしさを求めて」より（六）

名古屋市立大高幼稚園

せんせい　おんぶして

かたづけの時、きみ子が積み木の上から教師の背におわれてきた。それをみていたよしみもおわれてくるので、ふたりいっしょに背負って保育室の中をまわる。それをみていた子どもが

「おんぶして」

とあつまってきた。また背おってやるとつぎつぎに

「先生おんぶして」

とあつまってきたり、背おってまわっているところへ、ぶつかってきたりする。ほとんどの子どもが今度は背おってもらおうと、積み木の上にのってまっている。ひとりずつはめんどうなので、ふたりまとめて背おってやったのだが、かえってそれが子どもの興味を誘ったようであった。みんなが我さきにおわれようとするので、前からまっている子どもをおしのけるということもでてきた。その中でさとしが自分の前にのりだしてくるすぎおに対し、

「なんだ」

というような顔をみせておこっている姿がみられた。

「よし、じゃ今度はさとし君とすぎおちゃんだ」

といってふたりいっしょに背おってやった。

◇　◇　◇

このさとしの態度は年少の頃にくらべると著しい変化がみられる。情緒不安定で表情も暗くだいてやろうとすると、〃いい、いい〃といって拒絶する。手をつなぐこともうけつけず、教師のあとを二・三歩はなれて、ついてまわった入園当初、年少のおわり頃にもこの〃おんぶして〃ということがクラス全部に広がって背おってやったことがあったが、その時さとしは、みんながおぶさるのをじっとみていた。〃さとし君

もいらっゃい〃と声をかけると、〃いい〃という。〃先生はさとし君をおんぶしたいんだもん〃といって強引に背おってやったことなどが思いだされた。おぶさりたいという気持ちが素直にだせなかったのだと思うが、きょうのようすからも最近のさとしの遊びの状態の変化を思う。かわってきているなという目でさとしをみるから、さとしの新しい面がみえてくるのだと思う。このような見方をしていくことが大切であるということを、同じような経験をするたびに思う。（五歳児　六月二十八日）

ぼく　わすれちゃうもん

きょうはじめて、ゆうぞうが、七夕飾りのちょうちんを作った。クラスの子どもがちょうちんを作っているのをみて、

「七夕飾り、何を作ろうかな？」

とひとりごとをいっている。内心はちょうちん作りをしたいのだが、自信がないので

「やりたい」

といえないゆうぞうであることが、わかるので、

「ゆうぞう君も、ちょうちん作ってみょうか？」

とことばをかけてみた。

「だって、まるくするところできんもん」

という返事が返ってきた。二、三日前に、はじめてちょうちんの製作をはじめたとき、

「やりたい」

といいながら、いざ取り組む時になって、

「ちょっとみとる」

といってしりごみし、友だちの作るのをじっとみていたのである。みながら、もし自分がやるとしたら、まるめる部分ができないということを、考えていたのだと思う。

「できないところは、先生が手伝ってあげるから」

というと、ようやく紙に手をだし、取り組みはじめた。まるめるところは、自分でやろうともしないで、

「やって」

と教師にさしだす。その部分だけ手伝ってやる。やっとできたので、

「がんばってできたね」

と声をかけると、自分で作ったというよろこびで、にっこりと笑い、

「もうひとつ作ろうかな」

といって、ふたつめに取り組んだ。まるめるところは、やはり教師が手伝ってやった。三つめを作るとき

「ゆうぞう君、ひとりでもできると思うよ。一度やってみて」

と、そのまるめる部分をやってみるように声をかけてみた。教師のことばに、抵抗を感ずることもなく作りだし、自分ひとりでやりとげることができた。そして、

「いっぱい作らんと、作り方忘れちゃう

もん」
とか、
「先生、毎日これだしといてよ。いつも作るんだから」
などという。このことばから、作れるようになったという、よろこびの気持ちがあふれていることを感じた。きょうは、このゆうぞうだけでなく、みどりもはじめて作りこのふたりで競争のようにして、ちょうちん作りにはげんでいた。

◇　◇　◇

製作にかぎらず、すべての活動に対して
「ぼく、やれんもん」
を連発して、劣等感・自信のなさを示していたゆうぞうは、その日をさかいとして、非常に行動が積極的になってきた。子どもの心が動き出す、そのチャンスをとらえることは非常にむずかしい。

（五歳児　六月二十九日）

ぼくの家

たけひさが
「何か作ろうかな？」
といいながら、紙とはさみをもってきて作りはじめた。そのかたわらで、子どもたちと七夕の製作をしている教師に、いろいろ話しかけてくる。
「こんな形に切れちゃった」
偶然、おもしろい形にきれたものに目・口をかき、ちょうど指人形のようにして、手にはめこみ、
「こんにちは、これが手だよ」
と話しかけてくる。
「こんにちは」
と相手になってやる。
「おうちを作ってあげよう」
次は家作りに取り組みはじめた。四角形に折った紙をもってきて
「ベッドもいるよ」
といいながら思案しているので、窓をあけベッドをつけてやると、次に
「ドアーもいるよ」
という。ドアーをつけてやると、そのドアーに自分で作ったかぎをつけ加えていた。次に、煙突をつけてやると、その煙突のところから、しばらくして、
「今は冬だから、ここで火をたくの」
といって、何か作っている。
「それストーブかな？」
と聞くと、うなずいていた。ストーブと煙突が通じているというイメージを、そこにあらわそうといっしょうけんめいである。それができあがると、今度は、
「ひとりではさびしいから、もうひとり作ってあげよう。同じの作るんだ」
といって前の人形より小さめの人形を作った。
「この子はね、生まれたばかりの赤ちゃんで女の子なんだよ」

といって、とても喜んでいた。

きょう一日、たけひさは、この製作にかかりきりであった。次から次へと自分のイメージがふくらみ、それを製作の上に表わそうと、努力しているたけひさの成長した姿をみて、ほんとうに喜びで胸がいっぱいであった。

◇　◇　◇

教師の援助に依存することなく、それを足がかりにして、自分のイメージを表現していく。たけひさは、イメージと、能力・技術とがともなわない面がある。たけひさのイメージをこわさないようにしながら、技術面を援助してやったのであるが、その子どもにあった教師の援助の大切さを痛感した。

（五歳児　七月二日）

おばけやしきがはじまるぞ

一昨日から続いているおばけやしきごっこを、さきおはきょうもさっそく、

「おばけやしきやる」

といって、遊戯室に入り遊びはじめた。遊戯室では、おばけやしきごっこだけでなく女の子たちがレコードをかけ、リズム遊びをしていた。きのうは、女児のグループがレコードをかけると、男児のグループが、

「やかましい、おばけやしきをはじめるんだ」

といって電気を消してしまう。女児も負けずに電気をつけ、続きをしようとする、こんなことのくりかえしをしていた。そこで教師は男児に、

「おばけやしきがはじまるとき、教えてね」

といって、女児といっしょにリズム遊びをはじめたのであるが、このことばかけが、きょう生かされているように思ったのである。

「今からやるんだから電気つけて」

と女の子たちがレコードをかけて、リズム遊びを始めると、男児が、

「朝がきたぞ」

といって、家の中（積み木の家）へもぐりこむ。女の子のリズム遊びがすむと、家から出て、

「夜だぞ」

といっておばけのペープサートを出して遊び出す。

◇　◇　◇

このように、自然な姿でお互いの立場を感じ合いながら行動する姿がみられた。教師のことばかけによるが、子どもたちは、自分の遊びに満足感とか、充実感がもてるようになってくると、相手の立場も考えられるようになるのではないかと思った。

（五歳児　七月十五日）

かぎをかけてね

四、五人の女児のグループの中で、遊んでいたはずのやえ子が、園庭にひとりしょんぼりと立っていたので、教師がさそい、いっしょに砂場へ行く。すると、よしみがきて、

「この子だめなんだよ。ここにいなさいといっても、かってにでていっちゃうもん」

という。そしてやえ子に、

「キャンプに行くから、あなた（やえ子）は留守番をしていらっしゃい」

という。やえ子は、

「ひとりじゃ、さびしいもん」

と泣きそうな顔で教師にうったえる。

「ひとりじゃ、さびしいよね。かぎをかけていけばいいから、みんなでいったら」

と話してみた。しばらくしていってみるとやえ子もみんなといっしょに、ブリッジのところで遊んでいた。おやつの時間であることを知らせると、

「あー、おもしろかった」

といって、ブリッジからおりてきた。

◇　◇　◇

教師は、やえ子の気持ちを理解してやりまたよしみたちを責めることなく、しかも遊びをつづけることができるような、ことばかけをしてやりたいと思った。

〝かぎをかける〟ということばは自分（教師）ながらうまく行ったと、ひそかに満足を味わったのである。七月十五日の例でもあげたように、〝おばけやしきがはじまるとき教えてね〟ということばかけと同じであると思うが、このような場合よく教師は、〝やえ子もいっしょに遊んであげなさい〟とか、〝仲よくしなさい〟とか、命令的、叱責的な口調になりやすい。

自然さの中に教師の指導が、子どもの心情や行動にとけこむようなことばかけ、接し方をしていきたいと思う。それは子どもと接しながら、子どもと同じ気持ちになろうとするところで、子どもから学ぶことが多い。

（五歳児　九月十七日）

最近の本から

津守　真

清水えみ子著「ママ!! きいて きいて」（教育出版　昭五十）

清水えみ子氏は、これまでも幼稚園の中でとらえた子どもの姿を、数冊の書物にしておられるが、今回の書物は、幼稚園の教師である著者が、幼稚園の外でとらえた子どもと母親との対話を集めて注釈をつけられたもので異色である。実例を示さないと、面白味がわからない種類の書物なので、いくつか引用してみる。

「母　あぶないでしょ。やめなさいね。子　そっとやってみたいな、やれそうだから。母　いけません。やめなさいっていっているでしょ。」（P.6）

「子　それはいやなんだよ。パンタロンなんて、おんなのものだよ。いらない。かうなよ……。母　買ってもらうのになんです。わがままいって。子　いらないよ。うちにあるのはいていくよ。かえろうよ。うちでテレビみたほうがずっとずっとよかったよ。母　これ買うわよ。これはかないならお留守番よ。」（P.94）

どこかで出会ったことがあるような、こんな対話集が八十五もつづく。

幼児に関心のある人は、よく目のとまるような場面でありながら、これだけ根気よく記録されたものは、他に類がないだろう。私はずっと以前に、著者から、こういう記録を集めておられる話を聞いたことがあったが、それから十年近くもかかって、とうとう本にされたことにおどろいている。ここには、事実を見ることのできる眼がある。子どもの心の成長を考えるとき、母と子なのに、どうしてという、ここでも結局は解けていない疑問が流れている。

母親の否定的なことばが多く採録されていながら（それは街角でよく前会う事実なので）、それは冷たい批判ではなく、これが著者の幼稚園の母親だったなら、一押して逆転するようなものだろうと思った。

母親の温かい肯定的なことばも採録されている。否定的なことばが、よく街角で気がつくのに対して、肯定的なものは、指摘してもらわなければ、その温かさに気がつきにくいものである。幼稚園の保育でも、本当に子どもにとって、温か味のあるよい保育は、何気なく、あたり前のように見過してしまって、他人にわかりにくいものであると、あらためて思った。

楽しんで子どもの仕事をしておられる著者の生活から生まれた楽しい本である。母親に考えてもらうのに、有効なテキストであろう。

ハリス先生をお訪ねしたときのこと

田中都慈子

この夏は、何年来念願にしていたアメリカ旅行をついに実現することができた。七月三十日に出発し、八月二十三日に帰国する「二十五日間アメリカ横断バスの旅」に参加し、往きは、東京―ニューヨーク間と帰途サンフランシスコ―ヨセミテ国立公園―ロスアンジェルス―東京間をそのグループの一員として渡米した。

ニューヨークからサンフランシスコまでの十六日間は、ひとり旅をすることになるので、あわただしく用意をしながらも心配で仕方がなかった。しかし機会は二度と来ないかもしれないので行くことに決めた。その目的は、一九六八年にお茶の水女子大学にフルブライトの交換教授として来日され、十月から翌年三月まで日本で過されたハリス先生（ペンシルベニア州立大学教授）にまたお目にかかることと、先生のお友だちでやはり同じ大学の教授であるド・リソボイ先生にもお会いすること。ド・リソボイ先生は、私が以前にロンドンに行った時、先生も丁度研究のためロンドンにいらしていて、ゴールダーズグリーンのお宅に伺ったことがあり、是非お会いしたかった。そして出来れば、カナダまで足をのばし、今は農場をやっているカナダ人と結婚した友だちや、トロントで幼稚園につとめている友だちにも会ってこようと考えた。幸いに、突然に連絡したのに心よいお返事をいただくことが出来、ハリス先生からは、電話のかけ方からバスのターミナルの場所まで詳しく説明したお手紙をいただいた。

ニューヨークについた次の朝、なんとか無事にピッツバーグ行きに乗りこみ、八時間のバスの旅の末、夕方四時頃にステートカレッジのバスターミナルに着いた。ミセス・ハリスが迎えに来て下さり、車で先生のお宅にたどり着いた時には、心底ほっとした。大学を右手に、左手にゴルフ場の緑を見る、その辺一帯は閑静な住宅地である。建物の前は通りに面して芝生と、丈の低い木が植えられ、建物の奥には広い庭がついている。先生のお宅は、国道から少し入った静かなところで、そこに一週間半近くおじゃました。

丁度、大学の授業を終えて帰られた先生にお会いし、夕食をいただく。ペンシルベニア大学は、一年が四期に分かれているために夏も講義があって単位をとることがで

きる。これからをどう過すか、先生のご予定を伺う。夜、窓からチェリートクーの大木のみえるベットに入りながら、ここにこうやってきているのが夢のようだった。

次の日は土曜日で、先生は、こどものための本だけを売っている本屋さんにつれていってくださった。楽しい本や可愛いカードがたくさんあったのですっかり時間をオーバーしてしまった。その店は、大学の向いの通りにあり、一帯にのんびりしたいなか町といった感じで、こじんまりと楽し気だった。

その日の夕食は庭でたどんをつかってバーベキュー料理をしてくださった。その上その晩は、八時から大学構内で行われるバレーを観に行くという。大急ぎで着がえをして車で出かけた。開幕まで時間があり、あたりのようすをみていたら、あまりにいろいろな服装にすっかりおもしろくなってしまい、ハリス先生に言ったら、普段控え目でしゃべらないミセス・ハリスも目を輝かせて「あんなかっこうをして」とか「ねえ、あの人見た？　通りの向うの人よ」などと話しているのにおかしくなってしまった。私はお二人にはさまれて、はじまる前から楽しい気分を味わった。裸足で、背中は丸あき、スカートは床までのインディアン風、ヒッピー風から、超ミニとジーパンのカップル、ブラックタイにタキシード、ロングドレスのお年寄りのカップルなど、それぞれが口々にしゃべりにぎやかなことであった。バレーは、クラシックなものから、コミックなもの、そしてモダンなものまで、とてもスピーディでおもしろかった。

帰りは、「早く早く」とすごい勢いで車に乗りこみ、混み合う前に駐車場を出た。真暗闇の中を走る、大学の門まであまりの広さに驚いた。十一時すぎに家についてから、急いで夕食の後片づけをする。先生もお皿をふいてくださる。ミセス・ハリスは「アイスクリームを食べよう」とこどものようにいう先生をみながらペパーミントとチョコレートのアイスクリームを盛ってきてくださる。一日がとても長く時間がゆっくりとたった感じだった。

日曜日は、いつもより二時間遅く九時に朝食というので、朝、時間まで露のおりた庭を歩く。ロビンが遊びに来ていた。朝食後、家の近くのゴルフ場からみえる平らな山並みのタッシーマウンテンまで一時間のドライブに行く。夏の花が終わり、秋の花が咲く前で、花のない時期だそうだ。ペンシルベニア州の州の花ワイルドローレル（しゃくなげの一種）がたくさんあり、「花は、帰ってからみせてあげる」といわれる。山は州の所有になっていて、勝手に木を切ったり、家を建てたり出来ないことになっているそうだ。車をとめてブルーベリーの実を摘んでいる人たちにも会った。キ

ャンプをしたり、人造の湖で泳いだり、釣をしている人々もいる、木のにおいと静けさがあたりをおおっていた。

午後にペンシルベニア大学の大学院に留学中の大戸美也子さんがみえることになっているという。大戸さんは、ハリス先生のお宅に一年半いらして今は学生寮にいらっしゃるそうだ。先生は、それまでガレージの掃除をするといわれて、まるでジャングルの中の戦闘服のような緑と茶のぶちの作業服を着て庭に消えた。私はバスルームの掃除にとりかかった。後でわかったことだが、毎週木曜日にミセス・ギャラガーが掃除をしに来てくれることになっているのでミセス・ハリスは完全に掃除から解放され、その時間を本を読んだり、手紙をかくのにあてていらした。

掃除を終えて居間におりていくと、アメリカ北部の花の本の、しゃくなげのところが開いていた。私の知りたいもの、興味のありそうな本が、絶えず入れかえられて居間の机の上におかれていた。その発見は、私にとって最大の楽しみであり、その無言のおもてなしに感激した。たくさんの鳥、花、新しい本に、毎日会うことができたのである。

昼食にみえた大戸さんと一緒に、近くに住んでいるアーミッシュの話を興味深く伺う。十八世紀に、スイス、ドイツ、アルザスからやってきた人々で、今も、電気、ガス、水道のない当時のままの生活を続け、馬車をのりものとして彼ら独自で暮している。家も共同で建て、宗教も教育も彼らだけで行なっているという。写真など見せていただく。

その午後いっぱいを大戸さんの案内で、学生寮、図書館などみて回り、あまりの規模の大きさにびっくりする。キャンパスの芝生の上をりすや、りすに似たねずみらしきものが急いで穴に入ったり、木の中の巣に入りこむのを見る。鹿が庭に入ってくるところもあるそうだ。

先生の家は、高台の端で、ずっと道は下り、裏の方は、低い盆地のようになり、山小屋のような家が、ポツンポツンと立ち、洗たくものがつなにはためいていた。牧場のようなさくがずっと続いている。野の花が咲き乱れ、国道は果てしなく続いている。

次の日、朝五時にハリス先生のつくってくださったトーストとコーヒーをいただき、夜明け前の暗さの中をフィリップスバーグの飛行場まで送っていただく。

その後、友だちのいるモントリオール、オタワ、トロントを回り、ワシントンに住むハリス先生の娘さん夫婦のところによって、また先生のお宅に帰ってくる。

旅の話に花が咲く。夕食の時にナイアガラの滝のところでみつけた小さな茶色の陶器のあひるのおみやげをそっとテーブルの

上に出したら「ナイアガラにあひるか」とおっしゃって大笑い。次の日、電話の隣りに置かれていた。

翌朝は、ナースリースクールを見学に先生がつれていってくださる。そこは、この町ではじめて出来たナースリーであった。夜は、パーティに、ド・リソボイ先生夫妻、二世のフクヤマ先生夫妻、大戸さんをよんでくださった。庭でにぎやかに食事をする。暗くなって、ほたるがまるで火花のように細い線となっては消える。へやの中に入り、夜遅くまで、すもう、鳥、英語、盆栽などの話に熱中する。

その次の日は、大戸さんも一緒にみんなでベルビルまで、アーミッシュの毎週水曜日のせり市をみに行く。付近の人々が大ぜい集まっていた。食料品の値段をせり上げたり、下げたりおもしろい。会場の外にも鍛冶屋の道具から、なべ、かま、アクセサリー、トマトパイ、衣類までなんでも売っている。

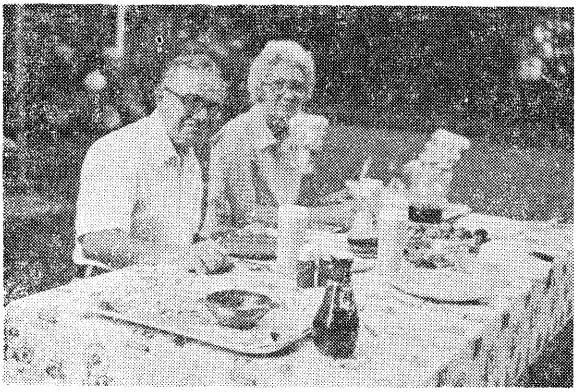
午後、町に用のあるミセス・ハリスと一緒に大学の構内をぬけて行く。あんなにたくさんの本をもっていらっしゃるのに一週間に一回必ず図書館に本を借りにいらっしゃるそうだ。その日は、めざす本がなく、一階のこどもたちの本のコーナーをゆっくりと見て回った。

夕方、ものすごい雷雨になり、街路樹の枝が折れたりした。大戸さんが夕食によんでくださったので、雨の中を学生寮に出かけ、大学の授業について話を伺い、学生食堂で食事をとる。いろいろな国の人に会う。

ステートカレッジをたつ前の日、ド・リソボイ先生が、朝迎えに来てくださり昼食をお宅によんでくださった。庭先が森になっているすてきなところだった。午後、ド・リソボイ先生の大学院の授業に出させてくださった。

とうとうお別れの日が来てしまった。出発の時刻には、またもやすごい吹きぶりになってしまい、その中をミセス・ハリスの運転で、フィリップスバーグに向う。飛行場は雨が上っていた。お別れするのが本当につらく、おなごり惜しかった。

（お茶の水女子大学）



お茶の水女子大学幼児保育現職研究会のおしらせ

幼児教育の現職者が保育の原理を研究するための定期研究会を開く予定ですので、希望の方は左の要項で申し込んでください。

一、昭和五十一年四月より、週一回、定期的に開催する。

一、お茶の水女子大学の教官が担当する。

一、午後六時―八時とし、一年間継続する。

一、定員　六十名

一、資格　幼児保育の現職経験のある者、短大卒またはそれに準ずる者、一年間継続可能な者。

一、規則書ご希望の方は左のようにお申し込みください。

東京都文京区大塚二―一―一（〒112）
お茶の水女子大学家政学部児童学科内
幼児教育研究室　現職研究会宛
氏名、生年月日、住所、現職を記し、二十円切手を同封して封書で申し込むこと。

幼児の教育　第七十五巻第二号
二月号　©　定価二〇〇円
昭和五十一年一月二十五日印刷
昭和五十一年二月　一　日発行
112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真
112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
108 東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社
101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番
◎本誌ご購読についてのご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

＊万一製品不良品がございましたら，おとりかえいたします。

主催　日本幼稚園協会
　　みどり会

第2回　幼児教育欧州視察団

欧州の幼児教育施設の中でも特に優れている4ケ国（イギリス，オランダ，西ドイツ，フランス）を訪れ，現況を視察しこれからの幼児教育の在り方を考えて頂く目的で企画しました。

コース　東京～ロンドン～アムステルダム～ハンブルグ～パリ～東京

期　間　昭和51年3月24日(水)～4月4日(日)　12日間

参加費用　**￥396,000**

昭和50年10月1日現在の航空運賃で50名以上のグループを基準，視察諸経費，通訳代，一流ホテル宿泊代，貸切バス代，観光諸経費，食事（3食）を含みます。

視察予定先　コーラム子供センター
ポンドストリートデー保育園
教育交流会議（ロンドン）
アムステルダム市役所
幼児教育研究所（ハンブルグ）
ＩＮＲＯＰ（パリ）など

詳細パンフレットもしくは問い合わせは

東京都文京区大塚２－１－１　お茶の水女子大学付属幼稚園内
日本幼稚園協会　会長　勝部真長
みどり会　会長　山村きよ
又は指定旅行社
㈱日本交通公社 海外旅行新宿支店
〒160 東京都新宿区西新宿１－18－８　ＴＥＬ（03）346－0182(直)
幼児教育欧州視察団係　井上・富田　（03）346－0166(代)

お子さまの成長に合わせてお選びください

情操をゆたかにし創造力をのばす
キンダーブック 1 ー情操
4月号〝くまさんと いちご〟
付録・つばめのおうち こいのぼり
団体購読価 150円

観察の眼をそだて心情をゆたかにする
キンダーブック 2 ー観察
4月号〝おひさま〟
付録・つばめのおうち こいのぼり
団体購読価 200円

科学する心を育て自然に親しませる
しぜん ー キンダーブック 3
4月号〝きんぎょ〟
付録・こいのぼり
団体購読価 200円

フレーベル館の 6大月刊誌 51年4月号

幼児の心を育てる
キンダーおはなしえほん
4月号〝やさしい ひつじかい〟
付録・こいのぼり
団体購読価 200円

園児をもつ母親のための専門誌
ホームキンダー
団体購読価 150円

保育をゆたかにする
実践的保育専門誌
保育専科 定価 300円

☆くわしくはフレーベル館代理店・支社・支店・営業所、または本社営業課 TEL 東京(03)292－7781(代)にお問い合わせください。